

【研究論文】

城郭から見た宗像の戦国時代 －大宮司宗像氏貞の時代を中心として－

藤野 正人

1.中世の城郭

1-1.私達がもっている城郭のイメージ

戦国時代といわれる戦乱の時代に、日本全国に多くの城郭が築かれた。城といえば、私たちが真っ先にイメージするのは、姫路城や、熊本城等の高い石垣の上に築かれた高層で白亜の大天守閣や壮大な御殿群、そして櫓や門を備えた、大規模城郭ではないだろうか。これらの城郭は、群雄割拠の乱世から転換して、織田信長や豊臣秀吉の全国統一事業の進展に伴い築城された安土城や大阪城を出発点とし、江戸前期までの半世紀足らずの内に全国に波及した完成期の築城技術に基づく本格的城郭であり、「近世城郭」といわれている。福岡県内には、およそ千を数える城郭があったといわれている。その多くは、前述の天下人や大名が築いた近世城郭ではなく、群雄が割拠した戦乱の時代に、一郡から数郡を支配する「国人」と呼ばれる領主や、村落を支配する小領主が築いた「中世城郭」といわれる城であった。

1-2.中世戦国期の城郭とは

「中世城郭」とはどのような形態の城だったのだろうか。「城」という文字を分解すると「土」と「成」の二つの文字に分けられる。「土」と「成」の二つの文字が表しているように、中世の城は、土壘・堀・切岸（城壁）といった、土を掘り、削り、盛り上げた防御施設によって形成されるものが大半を占めている。現在の私たちが城の象徴としてイメージしている、近世城郭における天守閣等の高層建築は中世城郭においては、「井楼」（せいろう）と呼ばれる物見矢倉程度の構築物しかなかったと考えられてい



小倉城

る。さらに、城内の建物も、掘り立て柱工法が優位を占め、礎石は御殿や城門などの重要建築物に限定した使用に留まり、建物の屋根も、当時、寺社建築の世界では瓦の使用が浸透していたが、中世城郭においての使用は稀で、高級な建物ならば桧皮（ひわだ）か、柿（こけら）葺き、一般的には板ないし萱葺き屋根が主流であったと考えられている。

また、石垣は、城門袖部や櫓台の袖周りなど、部分的な耐久性向上を目的に取り入れられる程度に過ぎなかったと考えられている。宗像において確認できる城郭遺構も、これら中世城郭と考えられる。

1-3.城郭の探し方

宗像の中世古文書等の文献を集約した「宗像市史史料編中世II」には、宗像の戦乱の時代を表すように、当地の領主であった宗像氏に関わる城郭が、城、要害、切寄と記述されている。

そして、宗像に残る小字等の古い地名や伝承の中にも、城郭が存在したことの痕跡が残っている。例、「城（じょう）」（岳山城、名残城）、「城山」（岳山城） 「城腰、城越」（石丸城、地島城、大島城、腰山城） 「切寄」（亀山城） 「神（じん）屋根」（稻光城） 「城の辻」（勝島城） ※「城」の発音は、圧倒的に「じょう」と発音する場合が多い。「神屋根」の「神」は、「陣」から変化したと推測される。

しかし、以上の事から、城郭があった場所を探し出し、当地を尋ねても、平地や低い台地上にあったと思われる城館の多くは、近代の造成等により消滅している。

また、近代の造成の影響を受けなかった山城においても、城址の現状は、建物等の上部構造物がなくなっていて、山上にただ平地が残るのみで、山林や深い藪に覆われており、どのような形状の城郭が存在したのか、中々想像することは困難である。

1-4.縄張（平面図）調査とは（地表面観察による現地調査）

上部構造物がなくなった城跡の形状を把握する方法として縄張図（平面図）作成によりその構造を分析する手法がある。縄張図調査は、城郭を踏査し簡易測量を行い、城郭の範囲を特定し、城郭のもつ防御性（人工的急斜面、堀、土塁、石垣によって守られた削平地の配置）に注目しつつ、城郭全体の平面構成を地形図に載せ図化し城郭構造を把握する。



調査現場で作成中の縄張図

1-4-1. 繩張り調査の方法について

簡易測量による縩張図作成は、方位磁石や巻尺等の道具で、こつさえ覚えれば、誰でもできる。距離の測定は、歩測で行なう人もいる。一人でも可能であり、道具はほとんどホームセンター等で揃えることができる。

1-4-2 縩張り調査から何がわかるか

縩張り調査は、縩張図を作成することにより城郭の規模を明らかにする。そして、それを構成する曲輪（城郭内部の平坦面）同士の関係やその配置構成を調べる。これは、現代の私たちが住む家の間取り図を見るのと同じで、家族の構成員の力関係が部屋の配置や広さに表れるように、その領主（城主）の権力構造（当主の権力の強さ・一族や家臣団との力関係）が城郭内部の曲輪配置にどのように反映されているかを調べる。

縩張り研究では、一つの城館だけではなく、周辺に残る多くの城館の遺構を調べ、比較していくことによって、築城主体や時期を検討する。城館の構造は、その立地・構築された時期・目的・構築主体によって差がでてくる。遺構を構成するパーツ（曲輪、堀切、竪堀、切岸等）には、築城主体によって特徴の見られるものもある。さらに周辺の古道・地名・遺跡等もあわせて検討し、一定の地域での役割（場合によると大名領国内での役割）を想定していく。



山中での簡易測量

1-5. 城郭の各施設の部位名称について

曲輪（くるわ）

城郭内部の平坦地のことで、建物などの内部施設を配置し、戦時の兵卒の駐屯空間とした。近世以降の城郭では「丸」と称させる（本丸、二の丸、三の丸など）。室町期以前の山城では、山丘頂部に発生した天然の地形をそのまま利用し、ほとんど土木の手を加えないラフな利用形態の曲輪もあった。こうした曲輪造成の程度の差も、城の年代判定の手がかりとなる。（許斐岳城の攻防戦では、「甲の丸」「詰丸」と文書に現れている。）

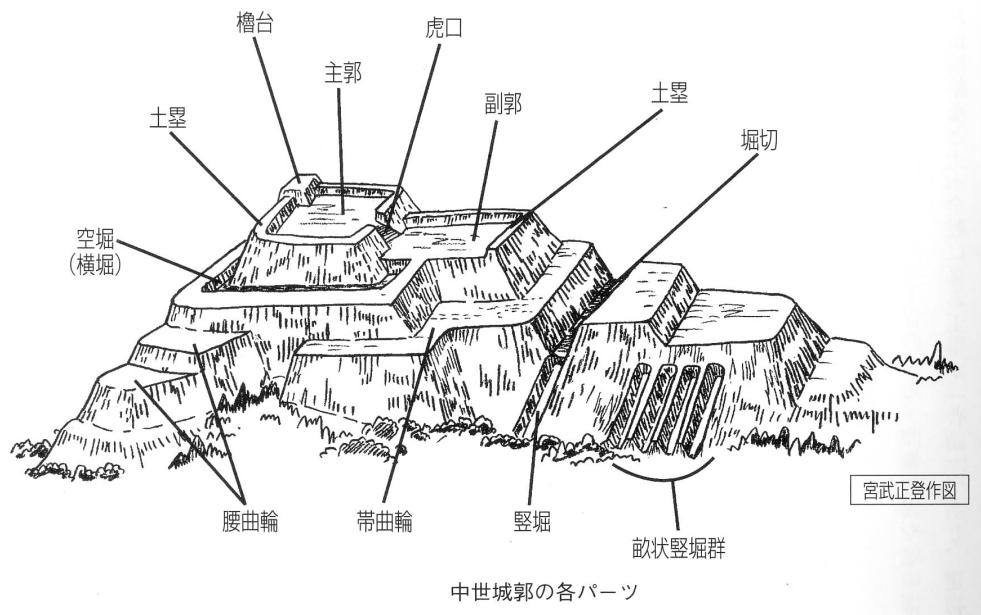
帯曲輪（おびくるわ）、腰曲輪（こしごるわ）

特定の曲輪を補佐する目的から付設された小規模な曲輪のうち、主要な曲輪の袖周りを廻る狭長な廊下状の形態を取った曲輪を「帯曲輪」と称する。一方、帯曲輪ほど長くなく、主

要曲輪の袖の一部のみを網羅する小曲輪を「腰曲輪」と言う。（帯曲輪の分りやすい例として 名残城）

主郭（しゅかく）・副郭

城郭の中心部に該当する曲輪の名称は、近世以降には「本丸」という用語が全国的に定着していくものの、戦国期以前には統一的名称がはっきりせず、東北・南九州の「上城」や「本城」、東国の「実城（みじょう）」、中部から西国の「一の曲輪」など、地域的相違が著しい。そのため中世城郭研究上の学術用語としては「主郭」と表現される。また、複数の



城郭の各施設の部位名称 宮武正登著「基山町の中世城館」(I)より

曲輪で中心部が構成される場合、その中枢となる「主郭」を補佐し次位に列する曲輪を「副郭」と称する。

切岸（きりぎし）

曲輪の縁辺部（墨線）から外法面にかけての造作では、外敵の登頂を阻むために地盤をできるだけ垂直に切り落として、壁のように仕立てることが多かった。必然、エッジに当たる曲輪「岸」部は、断面直角に近い急崖状となるが、そうした墨線を特に「切岸」と称した。なお、中世前半の城郭は、土木力の投入度が後世より低いために、相対的に曲輪内部の平坦化も不徹底で「岸」も曖昧な例が多い。

土塁

土を盛って築いた土手の一種で、曲輪の岸上に設けて障壁とした。塀・柵の基壇となることが多く、大型のものになると簡単な物見櫓を載せることもあった。（この場合は特にその部位を「櫓台」「物見台」と称する。）なお、耐久性を高めるため、土砂だけではなく石材を用いて墨状に構築したものは、法面に石積みを施しただけのものを含めて「石墨」と別称する。

虎口（こぐち）

曲輪の出入口のこと。門や木戸が設けられた空間全体を指す。時代や地域ごとに特徴のある平面形態をなすために、その城の構造的発達度や遺構の形成時期を判断する上での重要な指標の一つとなる。

空堀（横堀）

外敵の進攻を遮断するため、曲輪の袖回りなどで、等高線を辿るように走行する堀を言う。字句のごとく水は溜められていない。

堀切

空堀の一種に類型つけられるが、曲輪周囲を巡る構造ではなく、二つの隣り合う曲輪間や尾根地形の途中ないし鞍部などで「切り通し」状に設けられる堀で、主に单一方向からの進攻の遮断を意図している。堀両端が「豎堀」と直結し斜面上にまで延長する例が圧倒的に多い。

豎堀

山城の山腹における攻城側の横移動を妨げる目的から斜面に設けられる堀で、等高線に直交する走行で堀削された空堀を指す。ちょうど巨大な「滑り台」が斜面を駆け下りるような形状になる。この堀を何条も連続配列し、各堀の間に土塁を盛って遮断性を高めたものを、特に「畝状豎堀群」とか「畝状空堀」「畝状阻塞」と称する。（畝状豎堀の例として、岳山城、白山城、片脇城、宮永城）

縄張（なわぱり）

「テリトリー」の隠語ではなく、築城の最初に用地上に縄を張って、土木施行の予定線を明示する行為を指す。そのため、城造りの最初のプロセスを示す用語として使われる一方、現地での平面設計作業とも同義である。また、曲輪配列や堀と土塁の走行から形成される、城郭の空間構造（グランドプラン）を示す用語でもある。

普請・作事

築城工程のうち、曲輪造成や堀の堀削、石垣構築など土木全般に係る工事が「普請」であり、建物施設の工事が「作事」である。すなわち築城工事は、「縄張」→「普請」→「作事」というプロセスで進められる。

2.宗像郡の地理的状況と宗像氏について

2-1.宗像郡の地理的状況

2-1-1.筑前国の立地と様相

宗像郡のある筑前国は、十五の郡を有する大国であった。その立地は、玄界灘に面し、朝鮮半島や大陸にも近い利点から中世国内有数の国際商業（貿易）都市として発展した博多を有し、またそのことが博多の利権を狙い筑前国を領有化しようとする周辺の大勢力の影響を受ける原因にもなった。そのような状況下、筑前国内の諸国人衆は、戦国大名化の道を模索しつつも、常に周辺の大内氏、毛利氏、大友氏等の、巨大な戦国大名の牽制を受け、筑前一国を支配できるような突出した勢力には成長しなかった。

戦国期の筑前国には、一郡から数郡を有する秋月・高橋・原田・筑紫・杉・麻生等の諸氏が割拠していた。宗像氏も、宗像郡を中心に領主制を展開し戦国大名化を狙っていた国人といわれる領主の一人であった。

2-1-2.関門地域と博多の中間に位置する交通の要衝

宗像郡の立地は、中世、国内有数の国際商業都市博多と九州の玄関口「関門地域」の中間に位置しており、関門地域と博多の中継地点である海陸の交通の要衝であった。時代は下るが、宗像氏の領主としての支配が終わった後、筑前国主となった小早川隆景の時代、関門地域の小倉と小早川隆景の居城名島を結ぶ飛脚の中継地としても、宗像が指定されている。

(「天正廿年正月廿四日豊臣秀吉朱印条」『小早川文書』)

「小早川家文書」 豊臣秀吉朱印状

御本陣より次飛脚事、従（筑前）名嶋宗像迄、何時茂御朱印次第、急速可差遣之旨、堅可被申付候也、

（天正廿年）正月廿四日（秀吉朱印）

羽柴筑前侍従（小早川隆景）とのへ

御本陣より次飛脚事、従宗像小倉迄、何時茂御朱印次第、急速可差遣之旨、堅可被申付候也、

（天正廿年）正月廿四日（秀吉朱印）

羽柴筑前侍従（小早川隆景）とのへ

宗像は、その地理的環境から、博多を狙う中国地方の大勢力（大内・毛利氏）の影響を他の筑前の地域より受けやすい位置にあった。

2-1-3.海岸線に富み多くの島や浦を有している

玄界灘に面し、その海域には、福岡県最大の島「大島」を初めとして地島、勝島、沖の島等の島々や、津屋崎、神湊、鐘崎等の浦を有し、古代から海に生きる民を育んできた。鐘崎は、海域を響灘と玄界灘に分ける。また、宗像沖の海域は、地の島瀬戸をはじめとする海の難所であり、海岸への漂着物である寄物は、古くより宗像社の修理費用に充当される慣わしがあった。

2-2.宗像氏について

宗像の中世は、当地の領主であった宗像氏の歴史といつても過言ではない。宗像氏は、古代からの宗像社（辺津宮、中津宮、沖津宮）の大宮司であり、宗像社信仰の頂点に立つ祭祀を執り行う神官であった。それと同時に、宗像郡を中心に展開する宗像社の社領を経営する筑前の有力な在地領主であった。また、玄界灘に面し、多くの浦や島を有する宗像郡の海域は、古代から、海に生きる民を育み、宗像氏は、対外的にこの海域の倭寇の支配者としても認識されていた。（『李朝実録』世宗十一年（1439）十二月乙亥条）宗像氏は、浦や島を支配する海上勢力として、内外に認識されていた。

室町時代に北部九州に勢力を伸ばした、周防国を拠点とする大内氏は、宗像郡を含む筑前国をその支配化におき、宗像宮の大宮司職は、大内氏の裁定により決定されるなど、影響力を強めた。宗像地方の領主として最後の大宮司氏貞の父、宗像正氏（黒川隆尚）は、大内義隆に従い山口に居住している。そして、当地で黒川庄を賜り黒川姓に改姓。正氏は、大内氏の信任厚く、大内氏の水軍である警固衆を指揮するなど活躍している。

2-3.宗像氏貞について

2-3-1.宗像地方の領主としての最後の大宮司

天文十四年（1547）生まれ～天正十四年（1586）死去、四十二年の短い生涯を、大内、大友、毛利等北部九州支配を狙う強大な戦国大名の狭間で、時に応じて主家を変えながら、乱世の宗像地方の領主として家臣団を統率、宗像の民を守り懸命に生きた宗像大宮司である。

2-3-2.その勢力範囲

最盛期には、宗像郡並びに、鞍手・御牧（遠賀）郡の一部を領有（現在の、宗像市、福津市、宮若市、鞍手郡鞍手町、遠賀郡岡垣町、遠賀町）

3.宗像氏の城郭

3-1.宗像宮（辺津宮）を囲む諸城と宗像氏代々の居城片脇城

3-1-1.田島

田島は、宗像宮信仰の中心であり、海陸の交通の要衝。また、宗像の政治経済の中心であった。片脇城のある宗像市田島には、古来より海上交通の守り神として、広く知られている宗像三社の一つ辺津宮がある。古来より宗像社の大宮司であった宗像氏は、同時に宗像地方を支配する領主でもあった。

辺津宮は、『筑前国続風土記』によると、古くは海濱宮と記載されており、文字通り当時の田島の地は、入江で海浜に面していたと思われる。同じく宗像三社の一つ中津宮のある大島への連絡船が現在も就航している外海に面した神湊を外港とし、田島は内港的な関係にあった可能性も考えられる。

また、田島の地を東西に古代から道路が通じており、海陸ともに交通の要衝であった。田島の地は、宗像宮信仰の中心であり、宗像の政治、経済の中心であったと思われる。

田島『筑前国続風土記』

「宗像大宮司宅は、田島村の境内、本社の南に在。方百餘間。其跡今は田となれり。是大宮司中世より代々の宅地也。近世の氏男迄は此所に住む。氏貞の時兵乱を恐れて、常には赤間の薦が岳の城に住し、祭礼の時のみ此宅に来りしとかや。」

※宗像大宮司居館について花田勝広氏は、大宮司居館を表す御内の字名の伝承が、現在では途切れてしまっており、はっきり特定はできないものの、大宮司妻室宅を示す御東のホノケが田島公民館の位置にあったと伝わっていることなどから、大宮司居館は、氏八幡社の東側の水田に比定している。

吉田 京道『筑前国続風土記』

「吉田村の前に道有。京道と云傳ふ。是より垂水内浦へ越す。昔京へ上り行大道成しよしいへり。」

名兒山『筑前国続風土記』

「田島の西の方也。勝浦より田島へ越嶺也。田島の東の麓を名兒浦と云。昔勝浦潟より名兒山を越、田島より垂水越をして、内浦を通り、蘆屋へ行し也。是昔の上方へ行大道也。」



宗像氏貞期の勢力範囲

3-1-2.片脇城とともに辺津宮を囲む三つの城

3-1-2-1.北 吉田城（十郎ヶ城） 宗像市吉田



吉田城に比定される前障子山

釣川東岸にあり、南を釣川支流の樽見川が流れている。古代からの道路（京道）が、遠賀方面より樽見峠を越え、樽見川沿いに続いている。そこから宗像社付近で釣川を渡河し、そのまま西へ進み、片脇城と勝浦岳城の間を津屋崎方面へ抜ける。吉田城は、この道路を監視するための城と思われる。

「山上に平なる所二反許あり、五月浜に近し、里民は十郎ヶ城と云」『福岡県地理全誌』

樽見川の北、前障子山に比定される。西の谷に崩れた石壘を伴う削平地あるも、明確な城郭遺構は見当たらない。大障子城との混同も考えられる。

3-1-2-2.東 大障子城（津瀬城） 宗像市多礼



大障子城

麓の「滝の口」には、一時期、大方様（宗像氏貞の母）の居館があったと伝えられている。現在、山頂は、貯水槽が設置され改変されている。城の遺構としては、鎮国寺方面の尾根上に堀切が3条確認できる。

「山上平地二所有。凡三百坪許（略）山中に所々堀切有。宗像大宮司代々の居城なり」『筑前国続風土記拾遺』

3-1-2-3. 勝浦岳城 福津市勝浦



勝浦岳城

名子山より南に続く尾根にあり。辺津宮より津屋崎方面へ抜ける通路（大坂越）を直下に望む位置に削平地あり。同通路を監視するための城と思われる

3-1-3. 片脇城の遺構について

片脇城の遺構は、現在の興聖寺裏手の山にある。（興聖寺は、宗像氏代々の位牌があり、宗像氏の菩提寺である。）南北に長く伸びる尾根を主として、そこから派生する尾根にも遺構が残っている。その範囲

は、東西約300m、南北約500mに渡る。

片脇城の構えは、総じて東側を向いており、旧興聖寺跡（Aエリア）と色定法師墓裏の谷（Bエリア）を囲むように、尾根上に曲輪を重ねている。また、それぞれの尾根が連結するDエリアの南に伸びる尾根の最高所を主郭とした構えになっている。

初期は、麓に近いAエリアに城館を構え、有事の際、谷部のBエリアに逃げ込むよ

うな構想のもとに作られたのではなかろうか。そして、Bエリアを守るために、谷を囲む尾根C Eを中心に削平を加え、曲輪を設置してきたものではないか。最終的に、戦国期になり、山上に居住機能も含めた施設の構築が必要となり、C Dエリアに大規模な削平を加え、広大な曲輪群を作り出したものと考えたい。

なお、城が占地している山は、標高100m程度の緩やかな山である。戦国後期、宗像氏が拠点とした他の大規模城郭（白山城318m、薦ヶ岳城369m、許斐岳城271m）に比べると、要害性に劣ると感じざるを得ない。特に、最高所D1-1につながる西に下る尾根には、



片脇城

D1-1を掘り切って（h 1）独立させた他に防御施設はなく西からの備えは非常に脆弱である。

ただし、Fエリアのみは、他のエリアに比べると標高は低いものの天然の要害に敵状堅堀等を使用することにより、厳重な武装をしている。なお、図示できなかったが、CDEエリアに図示した曲輪の周囲には、用途不明幅2m弱の帯状の削平段が複数廻っている。当時のものか後世の造成か判断がつかない。

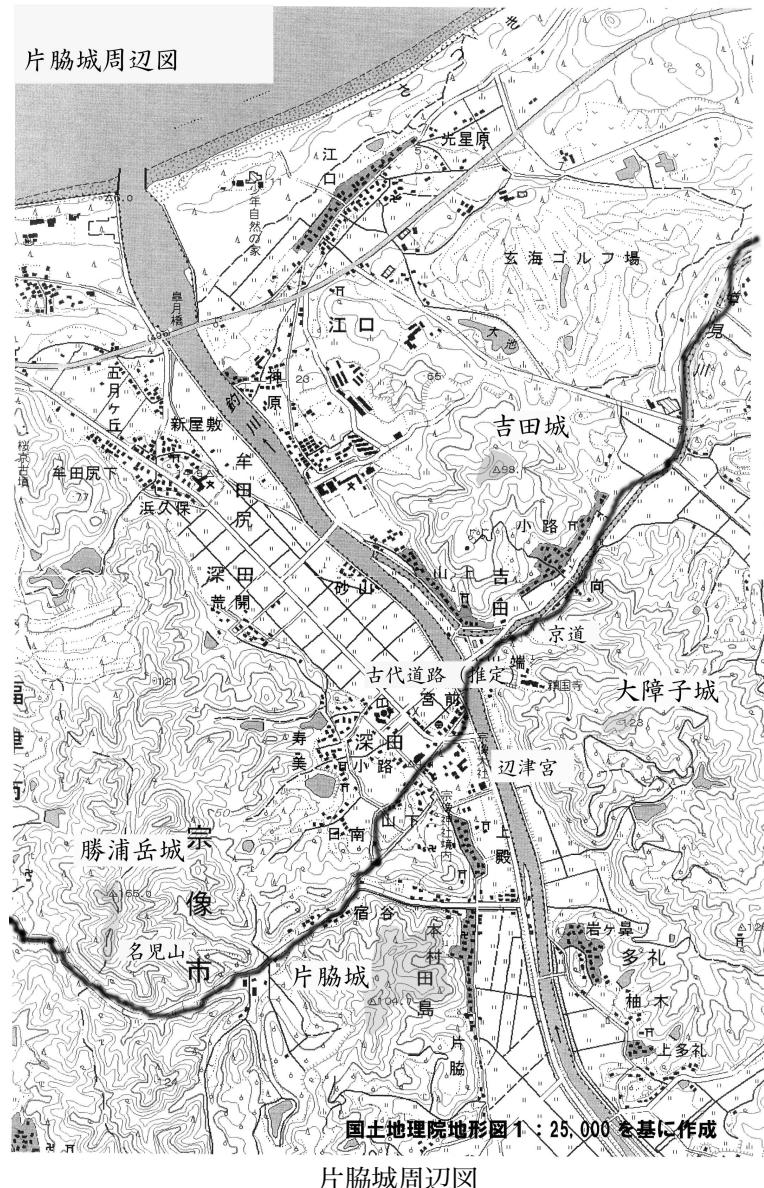
3-1-4.宗像氏の代々の居城としての片脇城

当城は、伝説上的人物とも言われる初代大宮司清氏が居所を構えたなどの伝承が残り、宗像では、最も古い時代から現れている城館であり、宗像氏代々の居城である。『宗像記追考』には、大宮司職をめぐる宗像氏一族間の争いの記述がたびたび出てくる。古い時代では、天養元年（1144）氏平、氏信が争い片脇館を焼くなどの記述がある。この当時は、山城としての機能はなく、麓に館を構える程度のものだったのかもしれない。

15世紀末明応年間、興氏、氏佐との争いの中でてくる葦間ヶ谷、岩ヶ鼻などの古戦場は、当城の近くであり、当城も戦乱の中で、次第に山城としての機能を整備されてきたものと考えられる。

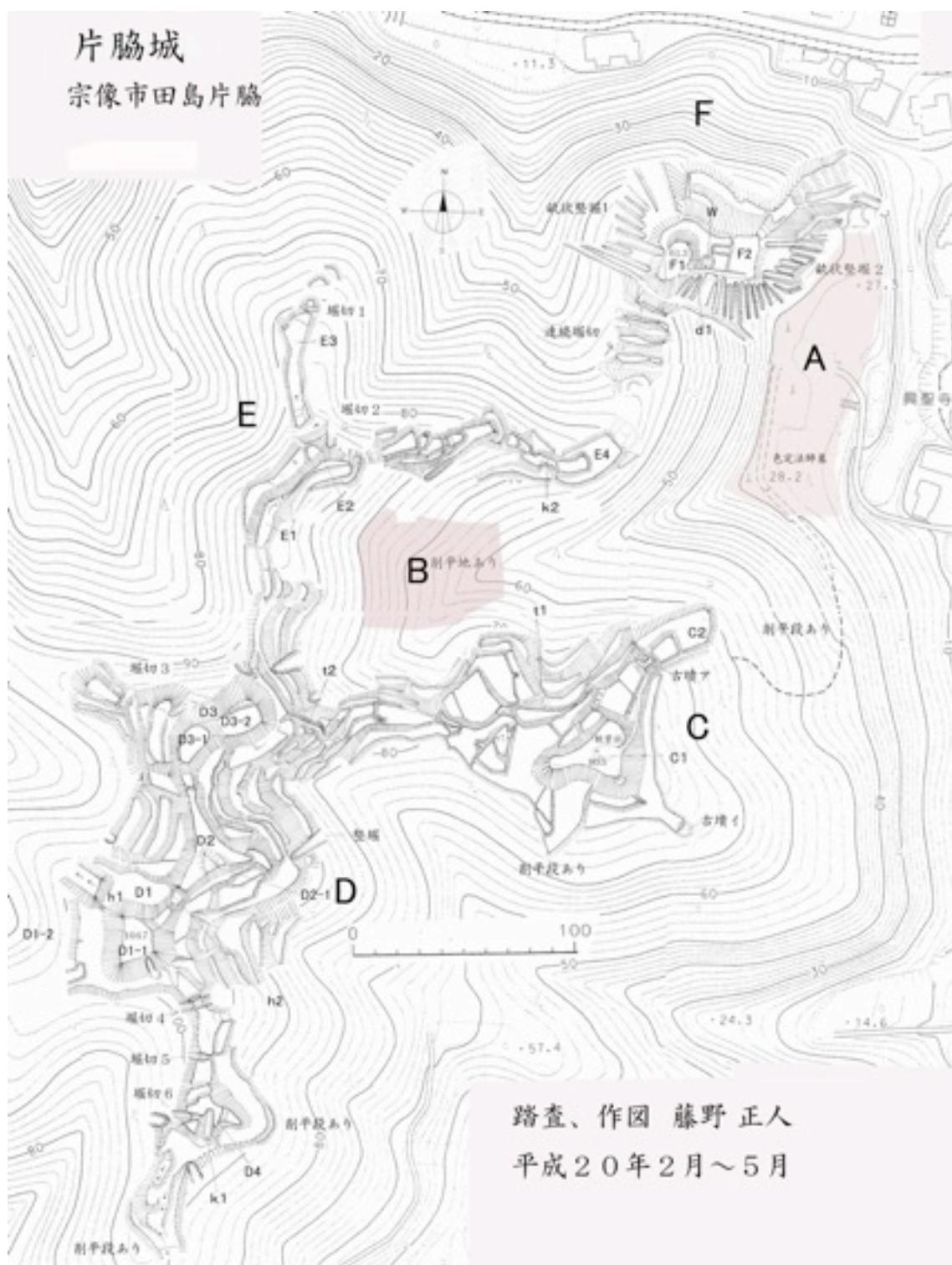
『筑前国続風土記』によると、宗像地域の領主として最後の大宮司宗像氏貞の先代、氏男の代まで、田島の大宮司館に住むとあるように、氏男のときまで、田島が宗像の政治の中心であり、同時に、辺津宮に最も近い当城が、宗像氏の居城として機能していたと思われる。

宗像氏貞（黒川鍋寿丸）は、天文二十年（1551）九月一日陶晴賢の謀反により大内義隆（周防、長門、石見、豊前、筑前守護）に殉じた先



片脇城周辺図

代宗像氏男（黒川隆像 正氏養子）の跡を継ぐため、陶晴賢に推されて、同年九月十二日宗像に入部する。しかし、片脇城に入らず、亡父宗像正氏（黒川隆尚）の隠居城でもあった白山城（宗像市山田）に入り反対派の制圧に成功し大宮司職を継ぐ。



片脇城縄張図

しかし、大内氏の滅亡後、永禄二年（1559）大友氏の支援する宗像鎮氏の侵攻により大島へ避難する等、動乱の時期を迎えるが、その後、毛利氏の支援もあって、旧領を回復し宗像郡一円及び、遠賀、鞍手郡の一部までを支配し最大領域を確保する。そして、筑前国でも有数の国人領主としての地位を得た永禄三年（1560）より、遠賀、鞍手郡経営をも見据えて、薦ヶ岳城（宗像市陵厳寺）を大改修し岳山と号し居城をこれに代える。

このような中で、氏貞は、「兵乱を恐れて常には薦ヶ岳城に住み、辺津宮のある田島には、祭礼のときのみ、仮の館に入り滞在した」『筑前国続風土記』と伝えるところから、田島の地、すなわち田島地域の主城である片脇城の脆弱性を認識していたため、居城をより要害性の高い白山城、薦ヶ岳城に移したとも考えることができる。また、そのため片脇城は、本城としての機能を失っていったものと思われる。

さらに、永禄十一年（1568）秋、大友勢が田島に乱入り、当城の城域内にあった興聖寺も荒廃した『筑前国続風土記拾遺』と伝える。この時期には、片脇城は、城としての機能自体低下し、廢城同然だった可能性も考えられる。

また、宗像社の信仰の中心でもあった辺津宮もこれに先立つ弘治三年（1557）焼失しており、田島の地は、動乱の時期に本城移転による政治的な機能を失い、さらに祭祀の場としても荒廃していた姿が窺える。

氏貞は、その後、大友氏との和睦後、東の間の平和を得た天正六年（1578）に、長年の悲願でもあった辺津宮第一宮本殿の再建を成し遂げる。

3-1-5 片脇城と小金原合戦

前述のように、戦国後期、本城としての機能を失い、その機能を低下させたと考えられる片脇城であるが、天正十年（1582）に宗像氏貞が、小早川隆景に送った、気になる一通の文書がある。

（史料）無尽集 山口県文書館所蔵

（天正十年）卯月廿六日 宗像氏貞 小早川隆景宛書状
態敬上候、

一 去十一月十二日至毛利鎮真要害高鳥広、戸次道雪兵糧差籠候条、翌日十三待請於吉川庄、敵切寄山下數ヶ度遂防戦、猝者以下尽粉骨候、勿論敵數輩討果、手負不知其數候、家頼之者共、是又手負討死數十人、誠碎手候、同十四日許斐岳取付、人数差籠候所二、愚領分、宮地岳從立花城取候間、即時二田島・宮永両口二向城銘々申付、至今日、鉾楯無寸暇候、仁保隆慰迄遂注進候ツ、於于今者不及申候、宝満、立花相詰候、山道故、無氣遣往返候、両家之襲以一家之力可申付事、氣遣仕候、（以下、略）

省略しているが、全七か条からなるこの書状は、北部九州の情勢を伝えるとともに、毛利氏に九州へ目を向けて欲しいと訴えている。具体的には、天正六年（1578）の耳川の合戦により、九州の最大勢力であった大友氏の衰退、それに伴う島津氏の北上、竜造寺氏の北部九州での勢力拡大の中で、北部九州の反大友勢力である竜造寺、秋月、筑紫氏等を糾合して、筑前の大友勢力（立花城主戸次道雪、宝満城主高橋紹運）に当たるよう毛利氏より影響力を駆使して欲しいという内容である。当地筑前では、書状に表されているように、前年の天正九年（1581）、後世、「小金原の合戦」として知られる戦国期鞍手郡最大の合戦が起きている。

天正九年十一月十二日立花城督戸次道雪は、同じく大友方の毛利鎮真（実）の鞍手郡鷹取城（直方市）へ兵糧を輸送した。翌十三日に、戸次勢の帰途を、宗像勢が待ち伏せし同郡吉川庄（宮若市）で合戦となった。宗像勢は、奮戦し戸次勢数人を討ち取ったが、味方も、多数の戦死者並びに負傷者を出した。そして、この合戦以降現在に至るまで、戸次勢と戦闘状態が継続していることを伝えている。

この書状の中で、気になる箇所がある。

この合戦で、戸次氏と戦闘状態になったことにより、宗像氏貞は、合戦の翌日十四日、宗像領西部防衛の拠点、許斐岳城（宗像市王丸、福津市八並）に、兵員を増強した。しかし、戸次勢の動きは早く、宗像領、宮地岳城（福津市宮司 写真3-1-5）を攻略した。そのため、さらに戸次勢の宗像領内侵攻に備えるため、宗像領北部宗像郡田島（宗像市）と宗像領南部鞍手郡宮永（宮若市）に、急遽、城の整備を行ったことを伝えている。

この、田島と宮永の二つの向い城であるが、位置から判断すれば、宮永の向い城は、宗像氏の若宮庄支配の拠点である、宮永城と思われ、田島の向い城は、片脇城と思われる。では、片脇城に、この文書に現れる、氏貞が指示した、向い城としての痕跡は残っていないだろうか。宮永城と片脇城に共通した部分は、多数の畝状堅堀群の設置である。

畝状堅堀は、宗像領の他の城郭（岳山城、白山城）にも使用例があり、それだけで、天正九年の改修と断定することはできないが、片脇城の畝状堅堀を設置している場所がFエリアのみに限定されていること。また、このFエリアが、5条の堀切を設置することにより、他のエリアから独立した一城別郭の造りになっていること。そして、何よりもFエリアの位置が、前述したように、片脇城の最も北に位置し、当時立花勢が奪取した宮地岳城のある津屋崎方面と辺津宮を繋ぐ道路を押える場所に立地している。これらのことを考えると、Fエリアがこの時期改修された、田島の向い城と考えてよいのではないだろうか。

なぜ、Fエリアのみの改修に留まつたのか？片脇城は、かつて宗像氏の本城として広大な城域を持った城である。しかし、天正九年（1581）当時、本城としての機能を失った片脇城には、その広大な城域に見合った人数を籠もらすこと、そして、決して要害に富んだとはいえないその城域すべてを維持することは困難であったと考える。

小金原合戦後の政治情勢から急遽最前線の城になった片脇城をコンパクトにまとめ、当時宗像氏の有する最高の技術として畝状堅堀等を設置し、針ねずみのように武装させ要塞化した姿が、Fエリアの遺構として残っていると考えたい。また、このFエリアの規模自体が、当時氏貞が田島方面の防衛に動員できた戦力そのものを反映しているとも言えるだろう。

おそらく、宗像氏の本城であったときの中心であったDCEエリアは、放棄せざるを得なかつたため、畝状堅堀などの設置が行われなかつたと考える。

3-1-6.唐傍氏の勝村岳在番について

年未詳であるが、立花山城を拠点とした大友氏の城督戸次道雪、統虎父子が、唐傍氏に出した一通の書状がある。内容は、鍋嶋氏とともに、勝村岳という城砦に配置された唐傍氏の在番の功績を勞い、それに報いるために恩賞として四町の土地を預け置いたというものである。

戸次道雪（鑑連）・統虎連署預ヶ状 『小金丸文書』

毎々如申、去年以来鍋島長門守以同心、於在々所々別而励粉骨、或分捕高名被疵、或戦死之輩、慰々事毛頭無忘却候、殊至勝村岳聳在番、名（各）辛劳之次第、難尽紙面候、仍於両郡中間四町分坪付有別紙事、預置候、可有知候、恐々謹言、

二月廿八日

(戸次) 統虎 (花押影)
道雪 (花押影)

唐傍新四郎 (虎政) 殿

天正十四年(1586)島津軍の大軍を相手に三笠郡岩屋城で玉碎した高橋鎮種の子で、天正九年(1581)頃戸次道雪の養子となった戸次統虎（後の柳川藩主立花宗茂）が唐坊虎政に発給したこの文書に記載されている勝村岳は、どこにあり、そして、唐坊虎政は、いつ勝村岳の城砦に城番として籠り、どの勢力と敵対していたのであろうか。

戸次氏がその領域として支配した糟屋郡、蔚田郡の城砦の中に勝村岳は現在のところ確認できない。

文書に記載された戸次氏の家臣と思われる鍋島氏については、前項の天正九年に起きた小金原合戦の着到状に鍋島姓が数名確認できることから鍋島の一族が小金原合戦に参加していることがわかる。

さらに、戸次氏側の記録である、「豊前覚書」には、この小金原合戦の直後、戸次氏は、宗像領に侵攻し、宗像領内の宮地岳城（福津市宮司）と灰塚（位置不明）という城砦を奪取し、戸次氏側の城番を置いていることがわかる。

その中で、宮地岳城の番将として配置されたのは、鍋島飛驒守であった。そして制圧した宮地岳地域の郷人（地侍か）を鍋島飛驒守の指揮下に入れていることがわかる。

五 立花御籠城之次第 『豊前覚書』

(上略)

一 右同年（天正九年）、院内、宮司嶽・灰塚両切寄せ御捕被成、灰塚ニハ内田源暑・足立対馬、番代ニ被仰付、院内之衆御付御番被仕候、宮司嶽ニハ鍋島飛驒守へ郷人手ニ付、番仕候へと被仰付候、

一 右同年、つくミ嶽御捕誘、院内之衆御番被仰付候、其後、大津留宗衆御番被仕候、

この宮地岳の山麓には、中世の国際貿易都市博多の外港として機能したのではないかと推定される、津屋崎の港湾があり、唐坊の地名が残っている。

そして、『宗像大宮司天正十三年分限帳』によると当地宮地郷には、その地名を名字とした唐坊氏の一族が居住していたことがわかる。

「宗像大宮司天正十三年分限帳」

宮地郷衆 七町 唐坊帶刀丞

々 武町 唐坊新八

『小金丸文書』の唐坊虎政は、旧姓は小金丸姓であり、その中で小金丸一族は、志摩郡小金丸（糸島市）を名字の地とした地侍であった。泊・元岡・吉庄氏らとともに「志摩郡衆」と呼ばれ、大友氏の麾下、柑子岳城（現在の福岡市西区今津・草場）城衆として活動した。

天正六年（1578）大友氏が、日向高城の戦いにおいて島津氏に大敗すると、北部九州における大友氏の影響力は著しく低下し、筑前でも各地の国人領主たちが、大友氏からの自立の動きを見せる。小金丸氏の名字の地志摩郡においても怡土郡高祖山城の原田氏が大友氏の志摩郡における拠点柑子岳城を圧迫し、大友氏の派遣した柑子岳城督木付氏は、城を退去し戸次氏領内へ移転する。恐らく小金丸氏を初めとした志摩郡衆も反大友氏の原田氏の幕下になるか、名字の地からの退去を選択せざるを得なかったのであろう。虎政の一族は、原田氏の幕下になるのをよしとせず、戸次氏の領内に退去したものと思われる。その後、戸次氏と宗像氏が小金原合戦後戦闘状態となり、戸次氏が制圧した宮地郷の唐坊の一族との関わりが想定される唐傍虎秀の養子となったものと推定される。

小金原合戦により始まった戸次氏の宗像郡侵攻は、天正十二年（1584）三月二十四日五国二島の太守とまで言われた龍造寺隆信が肥前沖田縄手で戦死したのに乘じ、北部九州における失地回復を目指す大友氏の筑後出兵に、戸次氏が参加するまで継続する。

以下文書は、宗像氏貞が、田島衆の深田氏に発給した感状である。年未詳であるが、深田氏が敵対勢力と戦いに及んだのが、戸次氏が制圧した宮地郷と宗像社辺津宮の間にある勝浦（福津市勝浦）であることから、時期的に最も可能性があるのは、小金原合戦後の戸次氏の宗像領侵攻時と考えられる。

宗像氏貞感状 『嶺文書』

去月廿一日勝浦年毛表伏勢之時、懸合遂防戦之、氏栄高名無比類候、并良（郎）従又四郎被手火矢疵左股一ヶ所、粉骨之次第、誠感悦也、弥可抽馳走事肝要之通、可被申与候、恐々謹言、

三月十二日 (宗像) 氏貞（花押）

深田中務少輔（氏栄）殿

戸次氏の小金原合戦後の宗像領侵攻が、勝浦まで及んでいたとすると、戸次統虎、道雪の唐坊虎政宛の連署状に記載された勝村岳城は、宮地郷と、宗像社辺津宮のある田島との間にある、勝浦岳城（福津市勝浦）と考えられないだろうか。

もし、そうであれば、宗像氏は、天正九年の小金原合戦の大敗により戸次氏の領内侵攻を許し、領内北部方面においては、宗像氏の信仰の中心地である宗像社辺津宮を眼下に望む勝浦岳までを戸次氏の制圧下におかれていたと考えられる。

当然、勝浦岳城と向かい合う宗像氏の田島の拠点城郭、片脇城は宗像氏領防衛の最前線となるに至ったと考えられる。多数の敵状堅堀で防備された片脇城のハリネズミのような武装はこのような緊迫した軍事的緊張状態を伝えているとも言えよう。

3-2 宗像氏貞が当初拠点とした白山城

3-2-1.白山城のある山田と宗像氏

釣川支流山田川の上流山田にあり、山田の地蔵尊で知られる増福院の背後の山である。増福院の前には、駐車場もある。（※「白山城址を守る会」により、麓や山中の城郭の施設には、分かりやすい表示板が設置されている。）

宗像と遠賀の境に並ぶ、四塚連山の一つ、孔大寺山（499m）より、西に派生する独立峰に白山城はある。



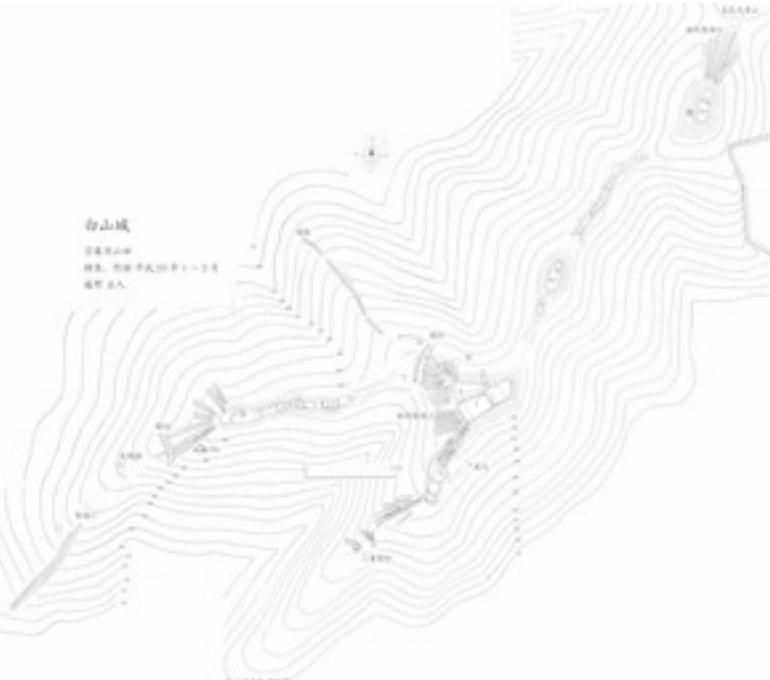
白山城

山田川は、百合嶺（地蔵峠）を源流として白山と金山に挟まれた山田を通り、須恵、土穴、稻元の土地を潤す。宗像大宮司七代氏高一族は、山田を拠点とし、山田川流域を開発し、勢力を増したと言われる。

3-2-2.白山城の構造

白山城は、白山山頂を中心に、南西に本村増福院へ続く尾根、西に横山方面へ続く尾根、そして、東北、孔大寺山へ繋がる尾根上に曲輪群や、堅堀、堀切、土塁など遺構が残っている。城域は、東西約800メートルに渡る大規模な城郭である。広大な曲輪群や敵状堅堀や堀切を組み合わせた備え

は、戦国期の城郭の様相をよく残している。現在の遺構は、宗像地方の領主宗像氏貞が、宗像入部より、岳山城へ居城を移す永禄五年（1562）まで本城として機能していた時期の姿を残している。主曲輪は、各尾根が連結する最も面積が広い白山山頂曲輪I（318.8m）だと思われる。特徴的なのは、増福院へ下る尾根と、西へ続く尾根の間に、敵状堅堀Aを設置し、尾根の遮断と緩斜面における敵の移動を



白山城縄張図

阻害している。堅堀の数は20数条を数える。西へ続く尾根は、堅堀の先端に横堀とも言えそうな土塁を伴う大きな堀切を設置し、西尾根からの侵入に備えている。

西方横山方面へ長く続く尾根には、やせ尾根に曲輪群（IV）や堅堀、堀切を設置しているが、特に尾根を遮断する目的で設置されたと思われる麓まで続く長大な二条の堅堀（堅堀C）は圧巻である。

城域の最も東、最高所324mのピークにも主郭を縮小したような二段からなる曲輪

（III）と孔大寺山へ続く尾根を破壊する目的で6条の堅堀からなる敵状堅堀Bを設置し孔大寺方面からの侵入に備えている。

増福院へ下る尾根は、堅堀の先に三段の曲輪（V）が設置され、さらに、そこから増福院方向に尾根を遮断する堅堀が数条あり、堅堀の先には、掘切が二条確認できる。

尚、曲輪I、Vでは、少数ではあるが白磁片が採取されており、居住空間として整備されていた可能性も考えることができる。

3-2-3.黒川鍋寿丸（宗像氏貞）は、なぜ当初、白山城を拠点としたのか？

白山城の最初の築城は、『宗像記』によると、鎌倉時代の大宮司氏国の大宮司職によると伝えられている。明応年間（1492～1500）興氏と氏佐に始まる宗像氏の大宮司職を巡る争いは、筑前を領国化しようとする周防山口の大内氏の介入を招き、大内氏は、これ以降宗像氏を家臣化していく。また、大宮司職そのものも大内氏の裁定により相続されることとなる。

天文十六年（1547）宗像正氏（黒川隆尚）は、大内義隆の裁許により、大宮司職と宗像の領主との地位を統合し、宗像氏続の実子、宗像氏男（黒川隆像）に相続させることとなる。正氏は、正室との間に生まれた菊姫を娶わせる。家督を譲った正氏は、白山城のある山田に隠居する。そして、この年、山田で没する。

天文二十年（1551）九月一日、中国地方から北部九州に勢力をもっていた大内義隆が、陶隆房の反乱により長門大寧寺で自害した。義隆に従っていた氏男は、義隆に最後まで付き添いともに自害した。その後、大内家督は、陶隆房により、豊後国主大友義鎮の弟晴英（大内義長）を迎えて継承されることになる。

義隆と氏男の死は、再び宗像氏の家督争いを生むこととなる。陶晴賢は、宗像家督を正氏の側室の子である六歳の黒川鍋寿丸（宗像氏貞。以下「氏貞」とする）に継承させるため擁立し、天文二十年（1551）九月十二日周防国吉敷郡黒川より宗像に下向させた。



白山城堅堀

当時宗像の地には、先代氏男の遺族は健在であり。強行入部と伝えられるように氏貞の相続に反対する勢力も多かったため、氏貞は、当時宗像の中心地であったと思われる辺津宮のある田島の地に容易に入ることができなかつたと考える。

白山城は、天然の要害であり、実父正氏が隠居した山田の地にあり、父の遺徳を偲ぶ者も多く、宗像に地盤を持たない氏貞にとって唯一拠点となりうる地であったであろう。氏貞擁立派は、白山城を拠点に、反対派を制圧していくことになるが、その内で白山城も整備改修されていったものと考える。

その後、永禄二年（1559）七月二十四日、十五歳になった氏貞は、自分の家督相続の犠牲となつた異母姉らを祀る増福庵に田地を寄進してその菩提を弔つてゐる。

3-3 大友氏との講和を有利にした当国（筑前国）無双の城「岳山城」

岳山城は、宗像市と岡垣町の境、城山（標高369m）に位置。宗像地方の領主としての最後の大宮司、宗像氏貞の本城である。鳴ヶ嶽城・赤間山城とも呼ばれる。



岳山城から白山城

城址は、宗像市陵巖寺、三郎丸、石丸、遠賀郡岡垣町上畑にまたがる。登山口は、いくつかあるが、宗像市側からは、JR福岡教育大駅前より西鉄赤間営業所横の登山口表示に従つていくと、駐車場のある中道寺登山口に着く。

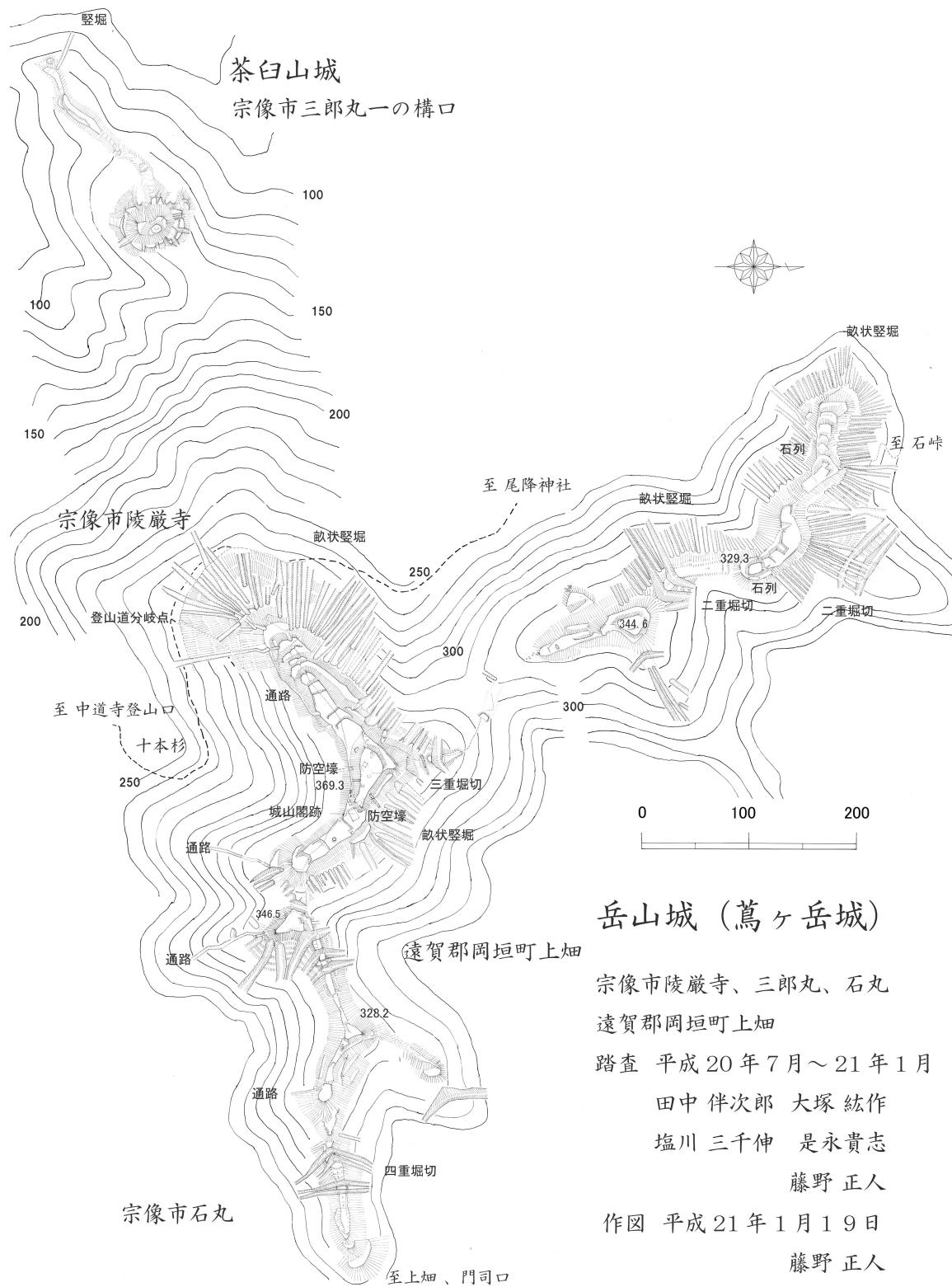
3-3-1.交通の要衝赤間

城の麓、赤間の町は、現在、鹿児島本線や主要国道である国道三号線が通る。古より博多往還（唐津街道）の宿場町として栄えた古い町並みを今も残し、芦屋方面と、長崎街道の木屋瀬宿（北九州市八幡西区）への分岐点ともなつていて交通の要衝である。

3-3-2.岳山城の規模と構造

岳山城は、山上に残る城の遺構だけでも、東西800m、南北500mの範囲に及び福岡県内でも屈指の大規模城郭である。山頂を中心とする尾根の要所に、曲輪を配置し、それを守るように尾根筋に堀切を設置、特に、山頂より東尾根（門司口）には、急斜面のやせ尾根が続いており、八本に及ぶ大きな堀切を設置している。

曲輪の斜面は切岸（人工的な急斜面）が形成され、その下方斜面には、畝状堅堀群を設置している。特に主郭となる山頂周辺（約70本）や石峠方面（約100本）の尾根に集中的に配置し敵の侵入を許さない構えを今も感じることができる。堅堀の総数は、約170本を数え、北部九州でも最多の部類になるのではないだろうか。



岳山城（葛ヶ岳城）

宗像市陵嚴寺、三郎丸、石丸

遠賀郡岡垣町上畠

踏査 平成 20 年 7 月～21 年 1 月

田中 伴次郎 大塚 紘作

塩川 三千伸 是永貴志

藤野 正人

作図 平成 21 年 1 月 19 日

藤野 正人

岳山城縄張図

※ 赤間山古城『筑前国続風土記拾遺』

(前略) 今も一の丸 二の丸 三の丸 芦屋堀
新堀 馬立場 馬賣場 広丸 城道 陣ヶ尾
水落谷 先陣楠 屋形口 大門口等の名残れ
り、(後略)

『筑前国続風土記拾遺』が作成された頃に
は、城の名残を示す地名が残っていたようだ
が、大半の地名が残念ながら、筆者の聞き取



山頂直下の石塁



岳山城尾根筋に設置された堀切



曲輪斜面の切岸

り不足もあると思うが、現在ではどの場所を指しているのか特定できない。

3-3-3.瓦、鉄滓等の出土物の意味するもの

山頂周囲から瓦、鉄滓（てつさい）、土師器、備前焼の陶器片等を採取されている。瓦の採取からは、山上に、当時としては珍しい、瓦葺の建築物があったことが想定される。備前焼等の陶器片は、水瓶等に使用されたことが想定され、ある程度、山上での居住空間が整備されていたことが想像できる。また、鉄滓は、鉄等の金属類を溶かしたときに出る滓である。鎌（やじり）等を製作する鍛冶工房等があったことも想定される。岳山城は、籠城戦に備えた施設が整備されていたことが考えられる。

3-3-4.氏貞が城山（鳶が岳）を本城
に選定した理由

岳山城が、現在遺構として残る規
模になったのは、宗像地方の領主と
して最後の大宮司である氏貞の時期
の改修によるものと思われる。

氏貞は、大内義長、陶晴賢政権の
後援により天文二十年(1551)六歳で
宗像に入部し白山城（宗像市山田）



鉄滓

を拠点にしたといわれる。大内氏滅亡後、筑前国領有を目指す大友氏の支援を得た、宗像鎮氏の侵攻により、十五歳の氏貞は、永禄二年(1559)に宗像の地を維持できず大島に家臣とともに渡海する。

独力で大友氏に対抗できない宗像氏は、毛利氏に援助を頼む。毛利元就の支援を得た氏貞は、永禄三年

(1560) 大島より渡海、鎮氏の拠点許斐岳城を奪回することにより、旧領を回復、その領域は、宗像郡、鞍手郡若宮庄、御牧（遠賀）郡芦屋、広渡まで広がった。

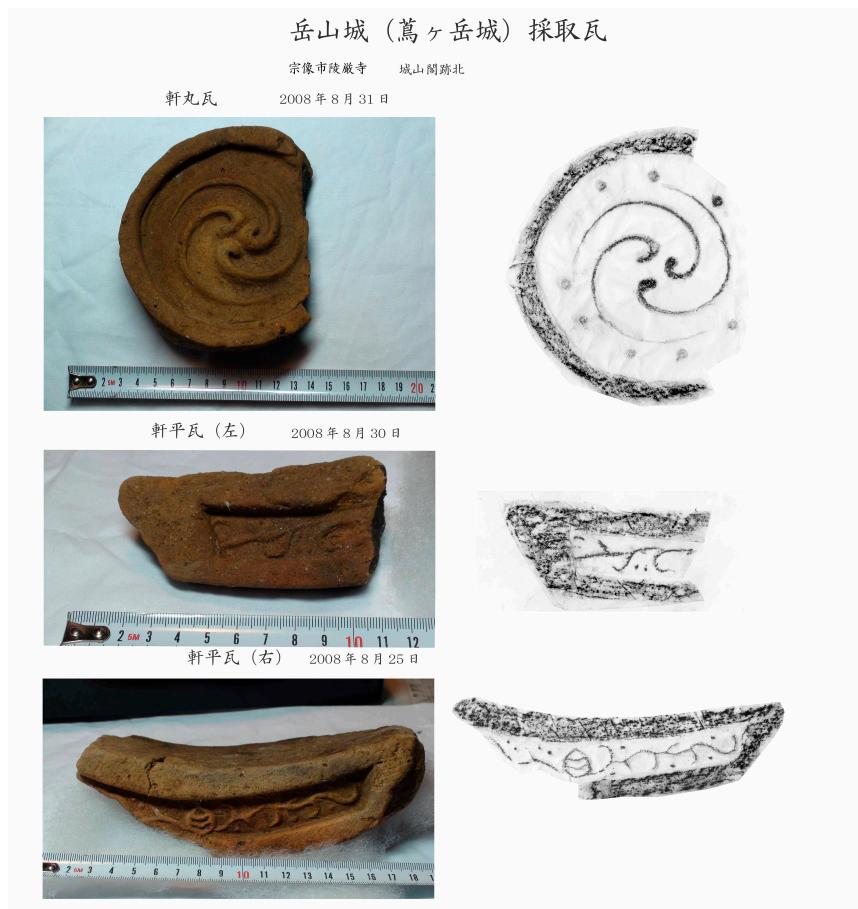
そのような中、同年氏貞

は、それまでの居城であった白山城に代え、新たな居城とするため薦ヶ岳古城の改修を開始する。薦ヶ岳は、御牧（遠賀）郡、宗像郡の境に位置し、また、宗像郡の南部に位置、鞍手郡にも近く、拡大した領域支配のための選地と考えられる。

また、急峻なその山塊は、天然の要害であり、前年、鎮氏の侵攻により、大島に渡海せざるを得なかった苦い教訓を生かし堅固な城郭の必要性を痛感したものと思われる。その後も、糟屋郡立花城を拠点とする大友勢の宗像領侵攻は続き、宗像氏の西部防衛拠点の許斐岳で双方は激しい戦いを継続する。宗像氏貞は大友氏の攻勢を耐え抜き、永禄五年（1562）遂に薦ヶ岳の古城は、宗像氏の本城として規模を拡張し完成する。氏貞は、新たに薦ヶ岳を岳山と命名する。

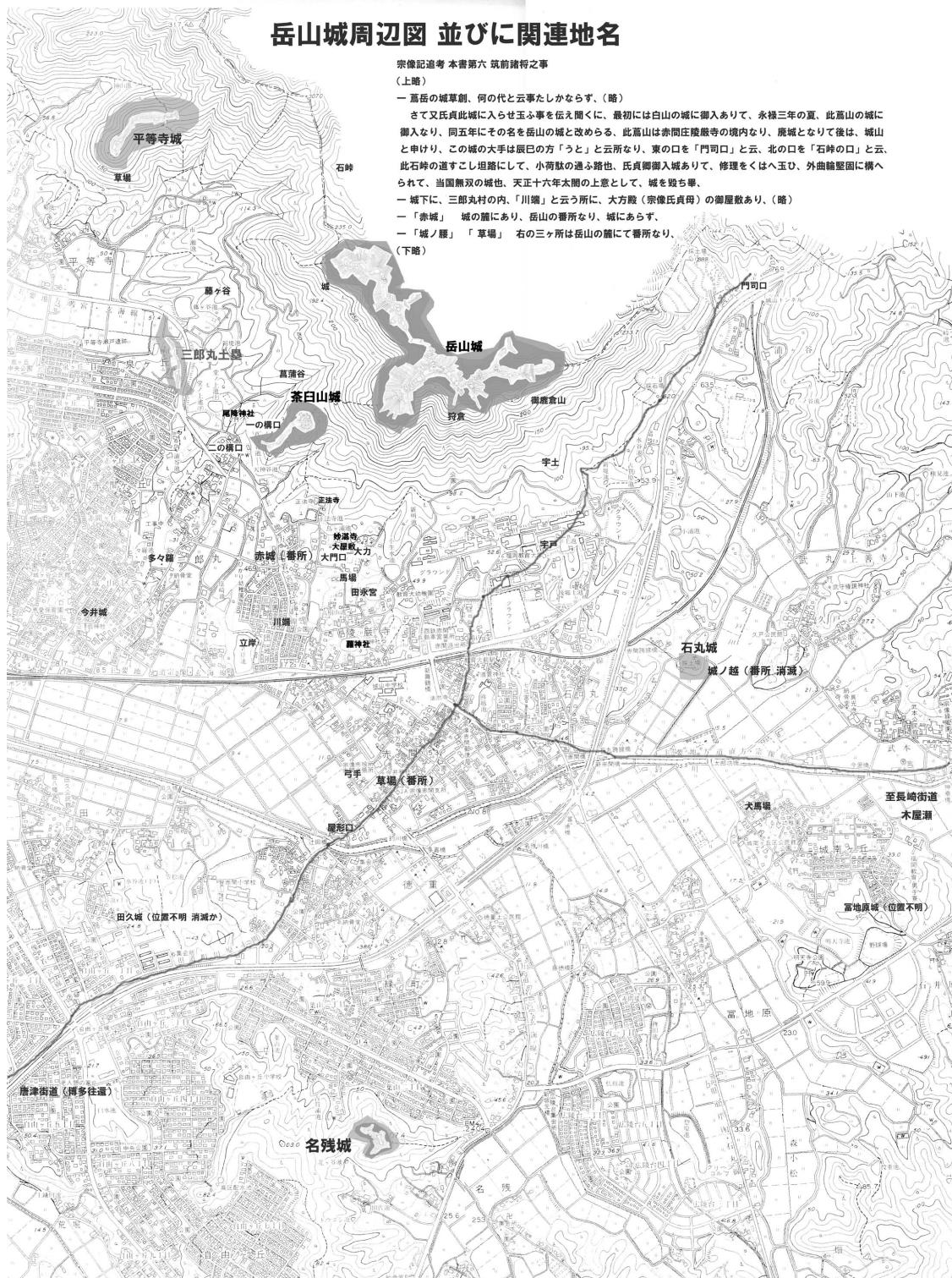
3-3-5.永禄十二年の立花陣と岳山城

岳山城がその要害の効果を発揮するのは、永禄十二年（1569）の大友勢が岳山を包囲したときである。永禄十二年、大友、毛利の北部九州の支配を巡る抗争も最終段階に到り、吉川元春、小早川隆景に率いられた毛利勢は筑前に侵攻、立花城を開城させる。情勢は、宗像氏が与する毛利氏優位に推移していく。数万の両軍は立花城を中心に対陣し長期に及ぶが、大友氏の支援を受け大内氏再興を目指す、大内輝弘が山口に侵攻したことにより情勢が一変する。



岳山城山頂周辺から採取された瓦

本国に侵入を許した毛利本軍は、撤退を開始。宗像氏貞は、飯盛山の陣を引き払い、すぐさま岳山に籠城する。その後、敗走する毛利勢を追尾する大友勢は、岳山城山麓に陣を取る。



二十五歳の青年武将となった氏貞は、領民や家臣の家族を、再度、大島、地の島に避難させ、自身は渡海せず、居城岳山城で抗戦の構えを示す。最終的に、氏貞は、必死の外交努力等により、宗像郡西郷など領地の削減を受け入れ和睦するが、下城することなく大友方に宗像の領主として認めさせ、和議をまとめることに成功する。岳山城は、まさに、『宗像記追考』が記すように、当国（筑前）無双の城であったと言っても過言ではないだろう。

3-3-6.城下並びに周辺の諸城砦番所

「本書第六 筑前諸將之事」『宗像記追考』

(上略)

一 本書に宗像赤間庄蔦ヶ岳の城、宗像四郎氏貞、云々、此氏貞の御事、前に記す事詳なり、

一 蔦岳城の草創、何の代と云事たしかならず、尊氏公建武三年西国下向の時、宗像が館に入せ玉ふとあるは、此蔦山の城に入せ玉ひたるなりと云伝へたり、さて又氏貞此城に入せ玉ふ事を伝え聞くに、最初には白山の城に御入ありて、永禄三年の夏、此蔦山の城に御入なり、同五年にその名を岳山の城と改めらる、此蔦山は赤馬の庄稜（陵）巖寺の境内なり、廃城となりて後は、城山と申けり、此城の大手は辰巳の方うとと云所なり、東の口を門司口と云、北の口を石峠の口と云、此石峠の道すこし坦路にして、小荷駄の通ふ路也、氏貞卿御入城ありて、修理をくはへ玉ひ、外曲輪堅固に構へられて、当国無双の城也、天正十六年太閤の上意として、城を毀ち畢、

一 城下に、三郎丸村の内、川端と云所に、大方殿（氏貞母）の御屋敷あり、初は田礼村瀧の口と云処に御座ありけれ共、城よりほど遠ければ、後ここに移り玉へるなり、(略)

一 赤城 城の麓にあり、岳山の番所なり、城にあらず、

一 城の腰 草場 右の三ヶ所は岳山の麓にて番所なり、(下略)

支城もよく配置されており、北に比較的なだらかな峠道である石峠を監視するために、金山より西に派生する尾根に平等寺古城、西に城山中腹標高150mに茶臼山城（宗像市三郎丸一の構え口 ※当該丘陵は地元では弥勒山と呼ばれている）を配置、さらに東には、城の越城（石丸城 宗像市石丸 造成により消滅）を配置している。

山麓には、赤城、大門口、馬場、（宗像市陵巖寺）そして氏貞の母が住んだという川端、一の構え口、二の構え口（宗像市三郎丸）等の城との関連を想像させる小字が今も残っている。

特に陵巖寺の地形は、城山から派生する二つの丘陵に挟まれた要害の地である。西は、赤城から造成によりなくなつた高樹山の丘陵ラインと、東は、田永宮から蔦神社に伸びる丘陵ラインに挟まれた要害の地である。

3-3-7.岳山城の城下について、氏貞の館はどこにあったか？

氏貞の平時の居館位置は、不明であるが、推定させる場所として南山麓陵巖寺小字「大力」付近に地元の古者が「大屋敷」と呼ぶ畠があり興味深い。

「大屋敷」の地名については、他の城郭の参考事例として福岡市東区、新宮町並びに久山町にまたがる立花山城がある。柳川藩立花山城絵図には、山麓に建物はないが大屋敷の広大な敷地が描かれており城主居館敷地を推定させる。現在も粕屋郡新宮町立花口の立花山登山口には、「大屋敷」の地名が残っている。

小字「大力」について、佐賀県内の城館調査を行なっている教育庁の担当者より教示頂いた話によると、佐賀県の事例において 「館」→「太刀」→「大力」と地名が変化した事例もあるとのこと。これらを総合すると、陵厳寺大力付近を氏貞の居館の有力候補地としてよいのではないだろうか。

さらに、宗像市図書館蔵陵厳寺区有文書には、陵厳寺地区には馬場屋敷、蔵屋敷など城下集落を推定させる地名が明治初期まで残っていたことが確認できる。

3-3-8.三郎丸土壘

西山麓、宗像市泉ヶ丘付近の主要地方道若宮玄海線沿いには、道路造成等により破壊を受けているが、現在も南北約200mに渡り幅4 mの堀を伴う土壘が

残っている。おそらく、造成以前は、さらに長かったと思われる。設置時期、主体ともはつきりしないが、岳山城の城下防衛施設の一つであった可能性もある。付近にある地名「一の構え口」、「二の構え口」は茶臼山城を含めこれらの防御施設との関連が地名の由来ではないだろうか。

三郎丸土壘は、近代の破壊でその一部しか現在確認できず、当初はもっと長大に伸びていたと推定されるものの氏貞の居館が陵厳寺だと仮定すると距離が離れており、氏貞の居館のある陵厳寺を防衛する施設としては即断できない。



陵厳寺大屋敷



三郎丸土壘

さて、天正十五年（1587）の豊臣秀吉の対島津九州統一戦において、秀吉が、現在陵厳寺にある正法寺に宿泊したとの伝承がある。この正法寺は、時期は不明ながら、当初、三郎丸の藤ヶ谷にあったという。藤ヶ谷の位置は、ちょうど三郎丸土壘の後背地にあることから考えると、秀吉の居所防衛のために設置された施設の可能性もないだろうか。

当時九州は、秀吉の支配の及ばない地であり、極論すれば敵地である。当然、敵地に入った秀吉は、圧倒的な兵力は有していたもののその交通路や宿泊の警戒には万全を期していたと考えられる。まだまだ、今後の研究が必要であるが、宗像地域の山城には余り見受けられない横堀施設を持つ茶臼山城を含め、三郎丸土壘の設置主体について、豊臣秀吉の可能性も提起しておきたい。

3-4.西部防衛の最重要拠点許斐岳城

許斐（このみ）城、許斐要害とも言われる。

所在地は、宗像市王丸、福津市八並にまたがる許斐山（標高271m）の山頂に位置。

許斐山の標高は、郡内の城山（岳山城369m）や孔大寺山（499m）には劣るもの、宗像郡の中央部に位置する独立した山塊であり、その頂上からはほぼ宗像郡全域を見渡せる。

3-4-1.博多往還(唐津街道)に沿って並ぶ諸城

南側山麓には、博多往還（唐津街道）が東西に走り、八並には、豊臣秀吉に関連する太閤水などの遺跡、さらに西に街道に沿って進むと、許斐岳の支城とも考えられる、

戸崎城（福津市本木）、高宮城

（福津市畦町）、さらに、立花領糟屋郡との境に、飯盛城（福津市内殿）が、配置されている。



許斐岳城

3-4-2.許斐岳城の規模と構造

遺構は、標高271mの山頂を中心に谷を挟んで南側の尾根（尾立山）まで曲輪が展開している。山頂で確認できる遺構の範囲は、南北約600m、東西約400mに及ぶ大規模な城郭で



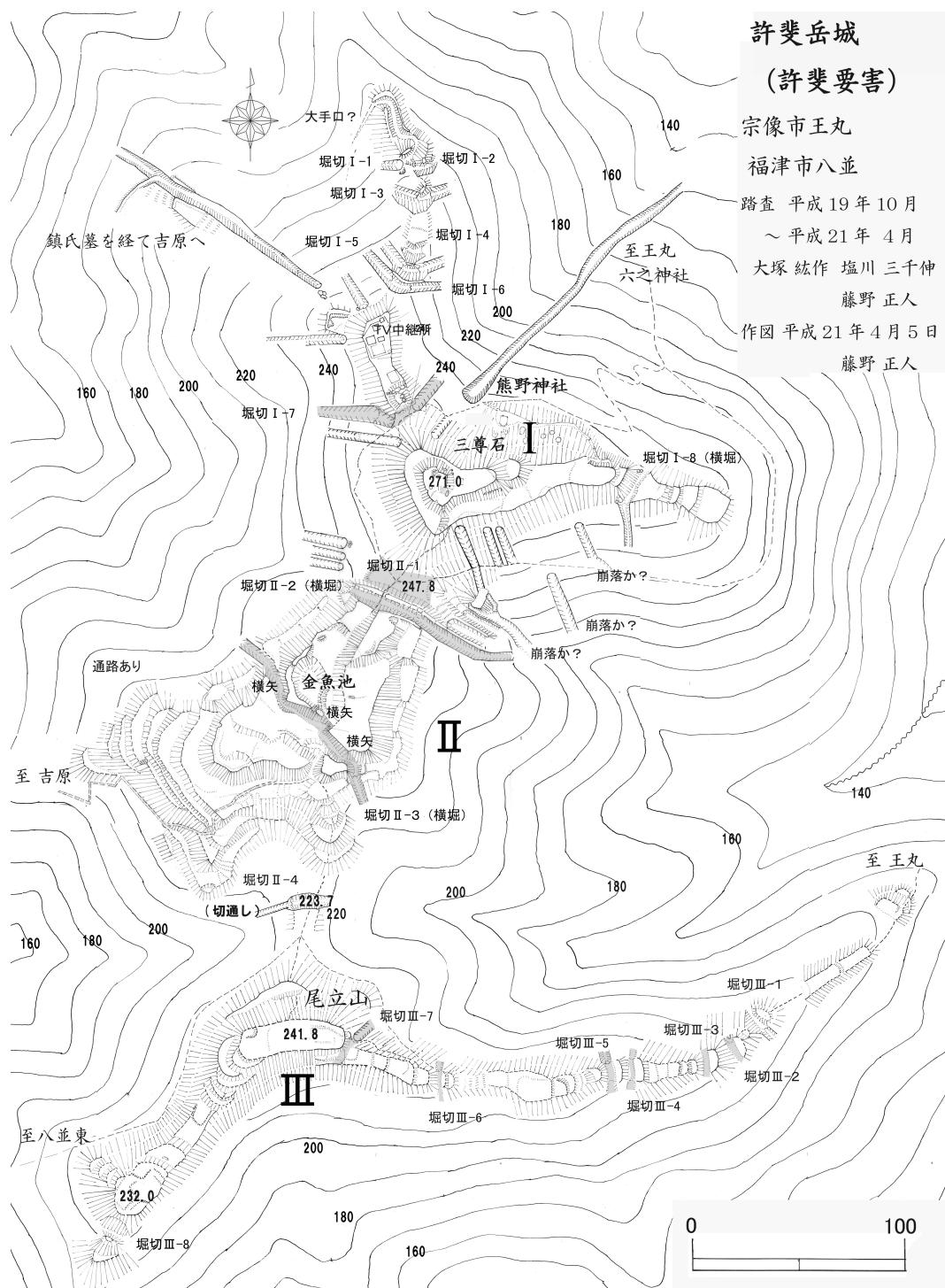
博多往還(唐津街道)に沿って並ぶ諸城

ある。

山頂の遺構は、大きく分けると三つの区画に分けることができる。

I区 山頂271mを中心に、北と西に展開する郭群である。山頂周囲からは、土師器片や青磁、青花片が採取できる。

東には、山頂郭を取り巻くように階段状に曲輪群が展開している。また、北尾根には、大きな堀切（堀切Iの7）を隔てて、現在テレビ中継塔等がある曲輪がある。特徴的なのは、



許斐岳城縄張図

この曲輪より北に続く尾根に多数の深い堀切が尾根筋を遮断し厳重に防備していることである。堀切Ⅰの1の先端は、堀底道となり西の吉原方向に続いている。谷筋の道ははっきりしないが、途中郭も確認できる。『筑前国風土記』が記す、「三尊石の前に吉原へ続く道あり、これ大手なり」とあるのはこの尾根を指している可能性もある。

II区 I区より西南に大堀切を隔てた一城別郭の曲輪群である。特徴的なのは、南北に区画を分ける長い横堀（堀切Ⅱの2、3）が二条確認できる。『筑前国続風土記』が記すところによる城の用水池と伝えられる「金魚池」がある。現在でも雨が降った後には、水が溜まつ



許斐岳城山頂遺物

ているのを確認でき、その周囲は土塁で囲まれている。三つの区域の中で土塁や、横矢掛り、横堀を設置した最も技巧的な曲輪群が展開しているエリアである。

III区 II区の南に、切通し（堀切Ⅱの4）隔てた尾根筋に展開する。尾立山と呼ばれ、東西に二つの郭を中心とした郭群がある。王丸方向へは、長く緩やかに下る尾根が続いており、この緩やかな尾根からの侵入を警戒して、現在は、ほぼ埋まってはいるが、多数の堀切（堀切Ⅲの1～7）を設置している。南麓には博多往還（唐津街道）が東西に走る。古くからあったと思われるこの道路を意識し設置されているとも考えられる。

3-4-3.歴史

許斐岳城が、戦の舞台として度々現れるようになるのは、弘治三年（1557）四月、当時の宗像大宮司氏貞を後援してきた大内義長が毛利元就に攻められ自刃し、中国地方、並びに北部九州をその領国とした大内氏が滅亡してからである。大内氏の滅亡後、大内氏の領国であった宗像を含む筑前国は政情不安に陥る。氏貞も自立の道を模索せざるを得なくなる。このような状況下、豊後を拠点とする大友義鎮（大内義長の兄）が、筑前を領国化しようと動き始める。

弘治三年七月八日、大友方立花氏の支援を受けた多賀隆忠による、許斐岳西の本木畠町河原（福津市畦町）侵入を初めとして、この後、連年、立花城を拠点とする大友方との間に戦いが続くことになる。大友勢の攻勢は強まり、永禄二年（1559）九月二十五日大友勢に支援された、宗像鎮氏の侵攻に、宗像氏貞は支えきれず、家臣や領民とともに大島へ渡海することになる。

宗像氏貞を大島へ追いやった鎮氏は、許斐岳城を拠点とするが、その支配は長く続かず、毛利元就の支援を得た宗像氏貞は、翌永禄三年（1560）三月二十八日許斐岳城を夜襲し、鎮氏を討ち、これを奪回、旧領を回復する。これから以降、宗像郡を含む筑前国は、その領有を巡って大友氏と毛利氏の争奪の場となっていく。

同永禄三年八月十六日、大友勢は、赤間表に侵入、翌十七日には、許斐里城に攻め寄せる。この両日の戦いは激しく宗像氏貞は、占部尚持を始め家中に多数の戦死者を出すこととなるが、許斐岳城を堅守。その後も大友勢の攻勢を耐え貫き筑前の有力国人としてその地位を固めていくことになる。

なお、永禄初期の頃の発給文書と思われる、大友宗麟が、筑後の国人麦生鑑光に宛てた年未詳六月二十八日付文書に、氏貞が、許斐城に立て籠もっていると記したものがある。氏貞の大島渡海前後のものと思われるが、この時期の文書からは、初期の居城白山城の記載が見られず、許斐岳城しか現れない。領内の東北部に位置する白山城周辺では、戦闘が行われている記録は見受けられない。特に、前述の氏貞の許斐岳城回復後、永禄三年八月十七日の許斐里城を巡る戦闘には、宗像氏の主要な家臣の多くが参加していることが、氏貞の発給文書から窺える。このことから、宗像氏が総力を挙げて許斐岳城防衛に当たっていたと考えられる。氏貞を大島へ追いやった鎮氏も許斐岳城を居城としたように、宗像郡の中央に位置する許斐岳城を領有できるか否かが、宗像支配の鍵になっており、氏貞にとって絶対に渡すことができない城が許斐岳城であった。そのため、自身も許斐岳に籠城し、領内の総力を挙げて許斐岳城防衛に当たったと考えることもできないだろうか。岳山城の完成する永禄五年までの時期、実質的な氏貞の居城は、許斐岳城だった可能性もあるのではないだろうか。

大友義鎮書状写 『大友文書録』

各如存知、宗像氏貞至許斐城盾籠之条、早々一勢差遣、雖可誅伐候、爰元勢衆相催候者、定而不能一戦可退散候、適彼城迄浮出候之条、此砌不抜足様討果度存、于今差延候、然者海陸共相調、寄々衆頓取懸、可打崩之段、豊筑衆江申遣候、（略）

（永禄元年カ）六月廿八日

（大友）義鎮 在判

麦生五郎三郎（鑑光）殿

その後、大友氏と毛利氏の筑前領有を巡る争いも最終局面を迎える。永禄一二年遂に、毛利本軍が筑前をその支配下に置くため、博多を目指し筑前に侵攻、大友氏の筑前拠点立花山城を開城させる。宗像氏も毛利氏に与し、立花山城への通路上の要地である許斐岳城には、毛利氏家臣小笠原兵部大輔が入城している。

大友毛利の戦いは、毛利氏優位に進むが、大友氏の支援により大内氏再興を目指す、大内輝弘の山口侵攻により、毛利氏は退却し、筑前国は大友氏の領国となり以降、平穏を取り戻す。

しかし、天正六年（1578）日向高城を巡る合戦（耳川合戦）において大友氏が島津氏に大敗すると筑前においても反大友の動きが出てくる。天正九年（1581）十一月十三日、大友氏に反旗を翻した秋月氏の圧迫に苦しむ、鞍手郡永満寺（直方市）の鷹取城主毛利鎮実に兵糧輸送をした大友方戸次勢の帰路を宗像氏領若宮庄衆が襲ったことから宗像氏と戸次氏との和睦が崩れ、戦いが再燃することとなる（小金原合戦）。宗像氏は、許斐岳城を防衛拠点に、北に片脇城（宗像市田島）、南に宮永城（宮若市宮永）を両翼に戸次勢に対する防衛ラインを固めることとなる。戦いは、天正十一年まで続き、許斐岳城も戸次勢により、吉原口まで押寄せられるが、総じて許斐岳城は、防波堤の役目を果たし、戸次勢を許斐岳以東の宗像領への侵入させることができなかった。

天正十五年（1587）豊臣秀吉の九州平定により、新たに小早川隆景が筑前国主として入部し、宗像郡における宗像氏の支配が終わり、宗像領西部防衛拠点としての許斐岳城は役割を終えることとなる。

3-4-4.許斐岳城における横矢掛りと氏貞死去後の宗像

許斐岳城の廃城の時期は定かではない。しかし、現在の遺構の中で気になる点がある。

II区金魚池に近い横堀（堀切IIの3）である。許斐岳城には、他に堀切IIの2、堀切Iの8の横堀が見られる。横堀は、堀の中でも最も発達した手法であり、かつ堀切II-3については、中央登山道付近また、両端において「横矢掛かり」の手法を見ることができる。

横矢掛りは、守備側が側面射撃を攻城側にかけるために、わざと曲輪の墨線に折れを作り技巧的手法であり、北部九州では、豊臣秀吉の九州平定以前には余り見ることができない。このことから、宗像氏の支配が終わる天正一五年以降、許斐岳城が改修された可能性を考えることはできないだろうか。

豊臣秀吉の九州平定により、筑前の地は、毛利元就の三男で当時毛利家の当主輝元の叔父に当たる小早川隆景が領主として任命される。小早川隆景は、当初立花城を居城とし筑前の地に入る。当時、朝鮮出兵を計画する豊臣政権により、筑前を任せられた隆景にとって、未だ戦国の余韻が残り政情不安定な筑前の地を速やかに安定統治することが大きな使命であったと考えられる。

小早川隆景は、その後、本城として名島築城を開始、その意図は、当初、秀吉が朝鮮出兵における本営を博多に置こうとする構想があった影響も大きいと考える。宗像の地は、ちょうど小早川隆景の本城名島と関門の中間に当たり、その通路上の要路に当たるこの許斐山を筑前統治のための支城として、さらに、朝鮮出兵の軍用道路になる博多往還を抑える要地として改修し、使用した可能性は考えられないだろうか。

許斐岳城の南、大穂にある宗生寺は、許斐岳城主と伝えられる多賀氏が建立し、また、宗像氏の一族許斐氏の墓もある許斐岳城との関係が深い寺である。ここに小早川隆景の墓（写真3-4-4）があるのも興味深い。

3-4-5.許斐岳城に関する文書

(1) 以下文書は、大内義隆死去後、大内義長政権下における軍事行動であるが、一体宗像氏は、誰の拠る許斐岳城を攻め落としたのであろうか？

宗像氏重臣連署奉書写 『新撰宗像記考證』

天文廿四年(1555)七月八日許斐岳被切執之刻、太刀打分捕功名無比類之旨、慥被知召候、向後弥不可有忘却之段、能々相心得可申旨候、恐々謹言、

(弘治二年か) 正月十九日

寺内備後守 尚秀
占部越後守 賢安
許斐三河守 氏任

占部右馬助（尚持）殿

以下、文書において、鎧（やり）による負傷者が多いのは、接近戦が行なわれた状況を表している。城の守備陣が十分に敵の攻撃を予想していれば、飛び道具による負傷者（石疵だけでなく矢疵、手火矢疵）が多かったと思われる。負傷者の疵の分析からも城方の油断を突いた奇襲による奪回であったことがうかがえる。

宗像氏貞手負注文 『宗像神社文書』

「承候畢、（花押）（毛利隆元）」

(永禄三年) 去三月廿八日許斐岳被切執之刻、太刀討鎧初分捕切矢高名被疵人数備左、

深田美作守（氏俊） 鎧疵、左手二ヶ所

許斐三河守（氏任） 石疵 右股

占部右馬助（尚持） 鎧疵 右指

石松備前守（備宗） 鎧疵、左手二ヶ所

吉田左馬助（安治） 鎧疵 右股

鎧初

吉田和泉守（秀時） 鎧疵 右手

吉田伯耆守（重致） 左股右腕 石疵

石松摂津守（典宗） 左腰右腕 石疵

石松加賀守（秀兼） 左手一ヶ所 石疵

(2) 文書発給者が異なると同一の城郭内部の場所も名称が異なる事例（城郭内部を表す「丸」の名称が使用されている古い貴重な例）

『新撰宗像記考証』

至去三月廿八日許斐要害取懸、任案（カ）中節、於城内詰丸、被遂防戦被疵 左手一箇所、殊鎧初粉骨次第、寔無比類候、何様可賀与候、恐々謹言、

永禄三年庚申四月朔日

氏貞

吉田和泉守（秀時）殿

至去三月廿八日許斐岳被切執之刻、切入城内甲丸防戦、殊鎧初、同被疵右手之通注進到来畢、誠抽諸輩粉骨之次第、神妙之至頼敷存候、弥御馳走専要候、猶氏貞江令申候、恐々謹言、

(永禄三年) 六月廿八日

(毛利) 元就 (花押)

吉田和泉守 (秀時) 殿

(3) 永禄十二年毛利氏の筑前侵攻時（立花陣）、許斐岳城も毛利氏の指揮下に入る
宗像第一宮御宝殿置札 宗像大社蔵

(略) 翌年（永禄十二年）筑前表可有陣替之由、到芸州註進之、故元就御父子三人、輝元長
府江御着陣、驚（警）船数百艘乗浮之、為通路小倉津構平城 伯州住南条勘兵衛尉被差籠在
津、許斐岳取付、小笠原兵部大輔在城、海陸被取寄、可成行之刻、（略）

(4) 許斐岳城の改修を表す文書（永禄十二年の毛利氏による筑前侵攻時か？）

『吉田ツヤ文書』

就（宗像郡）許斐岳普請之儀、炎天時分日々御辛劳之通、（吉川）元春・（小早川）隆景申
上遣候、誠御入魂祝着候、以（宗像）氏貞御一分、彼山普請被相調之由、御馳走難申聞候、
猶自是以夫（来カ）者、可申述□（候カ）条、□□（先以カ）不能躰候、恐々謹言、
(年未詳) 七月十一日

(毛利) 輝元 (花押)
(毛利) 元就 (花押)

○宛名スリ消え。写には「深河讚吉田和」とある。

3-4-6.里城について

文献などから許斐里城、吉原里城と呼ばれる里城の存在が指摘されている。

3-4-6-1.許斐里城

所在地 宗像市王丸

北山麓に当たる宗像市王丸、六の神社裏の尾根に堀切を伴う曲輪が確認できる。王丸登山
口最深部の、住宅より六之神社方向には、昔、屋敷が並んでいたとの伝承がある。トウロク
屋敷、カキツ屋敷などの地名が伝えられている。



許斐岳里城縄張図

3-4-6-2.吉原里城

所在地 福津市八並

吉原里城については、明確な城郭遺構は現在のところはつきりしないが、吉原登山口に近い、吉原池の西下の田は古くは、上屋敷と呼ばれていたようだ。

南北にそれぞれ許斐山から派生した丘陵が伸びており、それらの丘陵に挟まれた要害の地である。

また、吉原池下で、昔、戦があったとの伝承を知る人もおり、このあたりを吉原里城の有力な推定地としてよいのではないだろうか。

さらに吉原の登山口付近には、右近（うこん）屋敷、治部殿谷（じゅうとんだん）の地名が残っている。



吉原里城



吉原里城推定地

※以下文書の里城は、王丸、吉原いずれの場所を指してしるのであろうか？また、許斐岳城を巡る戦いには、占部氏だけでなく、許斐氏や大和氏が奮戦していることもわかる。

宗像氏貞感状写 『新撰宗像記考證』

去十七日至里城構口敵責懸之処、（許斐）氏任相共被差籠之趣、慥承知候、殊太刀打高名、各御心懸神妙候、隨而前十六日於長尾原合戦之時、僕從源左衛門討死不便之至候、各被仰談、弥馳走此時候、猶石松摶津守可申候、恐々謹言、

（永祿三年）八月十九日 氏貞
占部越後守（賢安）殿

宗像氏貞感状写 『新撰宗像記考證』

去十六日敵動之時、至赤馬表、被懸合別而馳走、息右馬助尚持事、頓登城、翌十七日於里城構口、頓討死不便之至、愁傷令察候、忠義之至令祝着候、各被仰談御馳走珍重候、猶石松摶津守（典宗）可申候、恐々謹言、

（永祿三年）八月十九日 氏貞
占部甲斐守（尚安）殿

宗像氏貞感状写 『新撰宗像記考證』

去十七日至許斐要害里城敵攻懸候処、遂防戦、同名左近允太刀打高名、殊分捕頸一名字不知之、剩討死之候、不便之候、不便之至愁傷令察候、忠義寔無比類候、何様何賀与候、恐々謹言、

（永祿三年）八月廿三日 氏貞
許斐安芸守（氏鏡）殿

宗像氏貞感状写 『新撰宗像記考證』

至去十五日立花・奴留湯吉原里城相絡之処、遂防戦、被疵左指一ヶ所、粉骨之次第、神妙之至候、向後弥可被抽忠貞事肝要候、恐々謹言、

三月廿日 氏貞
占部甲斐守（尚安）殿

宗像氏貞感状 『新撰宗像記考證』

於昨十六日（宗像郡）吉原里城構口敵取懸之処、堅固被遂防戦、每度御粉骨之至候、弥御馳走此時候、不可有油斷候、恐々謹言、

（永祿十二年カ）十月廿日 氏貞
占部八郎（貞保）殿

宗像氏貞感状写 『宗像記追考』

於去十六日吉原口、立花衆被懸合、遂防戦、被手火矢疵左頸一ヶ所、粉骨之次第、誠感悅也、弥可被抽忠儀事肝要候、恐々謹言、

（天正十一年カ）三月二十八日 氏貞
大和右近充ドノ

3-4-7. 許斐岳城には、どのような家臣が配置されていたのであろうか？

※『宗像大宮司天正十三年分限帳』による許斐岳周辺の有力家臣

1 村山田郷衆	許斐 左馬太夫	百六十一町
2 東郷衆	占部 大膳進	百五十町
3 村山田郷衆	大和 治部丞	七十二町六反 (吉原の地名で残る治部殿谷との関係がある人物か?)
4 村山田郷衆 吉田 河内守 五十町八反		
5 村山田郷衆	占部 源内右衛門	四十八町五反 (高宮城番か)
6 本木郷衆	許斐 兵部少輔	四十五町八反 (螻蛄羽子城番)

占部氏だけが、クローズアップされるイメージのある許斐岳城であるが、王丸と吉原の二つの里城と、山頂の各々独立する三つの区画は何を意味するのだろうか。

天正十三年の分限帳に見る許斐岳城山麓周辺の有力家臣との関係を無視できないのではないだろうか。許斐岳城防衛戦には、占部氏だけでなく、許斐氏や大和氏も文献に現れてくることに注目すべきではないか。

宗像氏の最も重要な拠点城郭である許斐岳城は、その規模は、本城である岳山城には劣るが、他の拠点城郭と比較すると著しく規模が広大である。各区画の新旧の問題もあると思われるが、複数の城将が配置されていたことも検討すべきではないだろうか。

3-5. 大友勢力との接觸点「飯盛城」

所在地 福津市内殿



飯盛城

城址は、内殿の南にある飯盛山（標高157.2m）の山頂にある。付近は、團氏の伝説が残る旦ノ原という標高約90mの台地になっており、名前のように飯を盛ったような円錐形の山容は、周辺の地からよく見える。山頂までは、遊歩道がよく整備されており、また麓に駐車場もある。

現在、山裾の北を東から西に走る県道町河原赤間線は、博多往還と重複している。この道路に沿って東には、蟻丘羽子（けらはご）城（本木）、高宮城（畦町）等の許斐城を拠点とする宗像氏の西方防衛の城砦が道路に沿うように設置されている。

また、糟屋郡との境目に近く、山頂から西には、眼前に立花山の山容を望むことができる。隣接する舎利蔵、薦野、米多比等の地は、立花山城を拠点とする大友氏勢力が支配した地である。鶴岳城（舎利蔵）、薦野城（薦野）、米多比城（米多比）そして、鷺白城（庭内）の大友方の諸城が飯盛城を囲む。

遺構は、東西約20m南北約10mの削平地を主郭とした小規模城郭である。主郭には、郭の縁を東から南にかけて土塁が巡っている。また、東西には腰郭がある。西の腰郭から西北に下る尾根に約25mの堅堀を見る能够である。この尾根は、そのまま内殿集落へ続き、尾根に通路が残っていることから、この堅堀状遺構も通路の一部ではないかと思う。

飯盛城をめぐっては、永禄十年（1567）九月十日に、宗像勢は、立花山を拠点とする大友方の立花・怒留湯勢と飯盛山山麓で戦っていることが、宗像氏貞が合戦に参加した家臣に送った感状として残っている。

また、永禄十二年、毛利氏は、筑前を手中にしようと、筑前に侵攻、立花山を巡って、大友氏と合戦に及ぶ。毛利勢は、立花山攻めの際に「だん」に中陣を敷くとあるが「森脇飛騨覚書」、飯盛山周辺の旦ノ原のことと思われる。『宗像記追考』によると、この時、氏貞は、毛利方に与し、飯盛城に陣を敷いた。



飯盛城縄張図

3-6. 大島城を初めとする浦と島の城

3-6-1. 宗像水軍と海上ネットワークを形成する諸城

大島城のある大島は、釣川河口に位置し、宗像水軍の拠点でもあった神湊より、市営渡船で約25分の玄海灘にある。

大島城は、大島の港から中津宮を経て、島の西部、津和瀬に向かう途中にある、独立した円錐形の急峻な城山（標高160.5m）の山頂に位置している。

城の遺構は、南北約20m、東西約10mの削平地があり、周囲に土留めと思われる石列（南東隅に一部石積みあり）が見られる。遺構の規模は狭小で、多くの人数が籠もることは望めない小規模な城郭である。

城山は、大島の最高峰ではないが、山頂からの眺望は良好であり、北方は、大島最高峰の御岳（標高224m）に遮られるがそれ以外は、東は鐘崎から西は津屋崎の海岸線を望み。宗像氏の主要城郭である白山城、岳山城、そして、許斐岳城を望むことができる。すぐ南東の直線上に宗像氏にとって

重要な港湾である神湊の守城として、勝島城（勝島）草崎城（神湊）を間近に見ることができる。この城の築城年代は、不明であるが、島の西海岸近くに位置し、その立地から玄界灘の制海権を確保するための海上監視のための城と考える。

3-6-2.乱世の避難場所としての大島、地島（泊島）

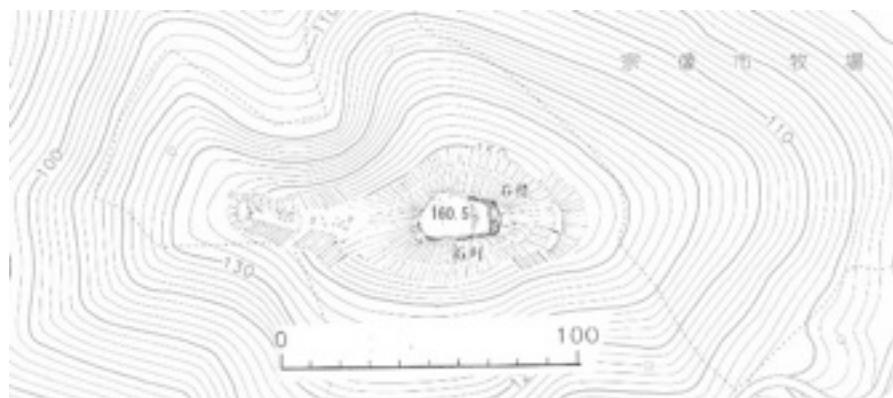
大島が、戦国期に脚光を浴びるのは、永禄二年（1559）、大友氏に支援された宗像鎮氏の宗像侵攻に対し支えきれず、時の大宮司宗像氏貞は、家臣や領民を連れて大島、地島へ避難する。毛利元就の後援を得て在島を続けた氏貞は、翌三年渡海し、大友方勢力の拠る、許斐岳城を攻め落とし本領を回復する。

その後、永禄十二年大友氏と毛利氏が、筑前の霸権を巡り争ったとき、毛利氏に与していた宗像氏貞は、岳山城に籠城し、領民や家臣の家族合わせて数千人を再び、大島、地の島へ恙無く避難させたと「宗像第一宮御宝殿置札」に記載されている。

大島、地島は、島自体が、海に囲まれた天然の要害であり、その周囲の海を、玄界灘の浦、島の人々で構成された強力な宗像水軍に守られた名実ともに宗像氏の詰城であったのであろう。



大島城のある城山



大島城縄張図

3-6-3.宗像水軍の最後の活動（秀吉の九州統一戦のため薩摩へ向った宗像水軍）

以下文書は、豊臣秀吉の九州出兵（島津征伐）時、木下吉隆（半助）が中村一氏（式部少輔）ら京で留守を守る豊臣秀次付の諸将にあてたものである。秀吉配下の諸国の水軍が、島津攻めのため、九州の東西両側から、南下していることを示している。その中に、西回りで薩摩へ向かった水軍衆の中に、麻生氏とともに、宗像水軍も参加していることがわかる。氏貞の死後、確認できる宗像水軍の最後の活動と思われる。

『古文書類纂』

好便ながら申せしめ候、

一、関白様去る月廿八日、関戸より小倉へ渡御なされ候、翌廿九日豊前の国馬之嶽へ御座を移され候、

(略)

一、日向浦へ警固の事、長宗我部宮内少輔・肥（備）国けいこ・芸州けいこ・豊後けいこ遣され候、

一、薩摩浦へけいこ舟の事、九鬼大隅守・脇坂中務少輔・加藤左馬助・間島兵衛尉・野島・くるしま・伊予の徳井・壱岐国けいこ・まつ浦けいこ・龍造寺けいこ・麻生・宗像・草野その外、諸警固差し遣され候、

一、九州の国々見物仕り候に、所柄の見事さ限りなく候、路次中も一段能く御座候、六月中には必ず御納馬たるべく候、猶これより申し入るべく候、恐惶、

（天正十五年）卯月八日

木下半助

中村式部少輔殿

山内対馬守殿

一柳伊豆守殿

日根野織部殿

堀尾帶刀殿

同 勘右衛門殿

3-6-4.詰めの城としての大島

『天正六年（1578）六月朔日、第一宮御宝殿置札』

依大内多々良御兒孫中絶、豊筑両国属豊弒大友之御幕下之条、当社茂雖被準其儀、有御内敵、動諍社職、御炎上三箇年目、永禄式年己未九月廿五日豊家祇候之鎮氏、語御家人、数万騎俄襲来、成社乱之間、一社之軍兵、奉守護社務様、到大島取退、其節豊芸義絶、偏為胡

（吳）越隔之条、憑毛利元就、御在島堅固也、而横入之族者、許斐要害仁在城之間、同參年庚申三月廿七日、從大島相催一千余騎、夜籠押寄、翌朝乘執要害、討果人駄畢、任其勢、古本領被斬返在所事、遠賀庄限芦屋津・広渡両村、若宮庄、西郷、野坂、赤間庄領家分、須恵村、稻元村、平等寺村、久原村、大穂村、内殿郷、無所残御進止也、豊筑之諸侍、昨日之敵、今日者成味方、

3-6-5.領民数千人を大島、地島へ避難させる宗像水軍の輸送力

『第一宮御宝殿置札』

岳山事、誠一国一城雖為躰、離社地可就他國土事、神明仏陀之冥鑑難遁之由、依 上意、不傾于他一人、公私御在城之處、三箇日之後、豊家之諸勢、当城山下仁、執近陳、送數日、可挫催雖為必定、城内堅固事、恰巨靈神以守固太華山、至大島・泊島、御家人妻子勿論、鄉民數千人、取渡無恙之、終自豊陳、和睦之大望在之、

大島城址 『福岡県地理全誌』

村の西一里許り、御岳の西海岸の丸く高き峯なり、上は広からず、陶器の破碎したるか、今も出ると云、宗像大宮司氏貞の時、乱世なれば、大島を以て、宗像のつめの城とせり、要害よければなり、是に依て、許斐安芸守氏鏡、占部八郎貞保、吉田兵部少輔貞勝三人を遣て、常に守らしむ、永禄二年己未には、氏貞も隣国の敵を此に避けて、翌年まで在城せり、

3-6-6.その他の諸城

3-6-6-1.大島城（城腰）

大島港の北の台地に城腰の地名が残る。港を押える位置にある。『筑前国続風土記付録』大島図にあり。地名から城郭があつたものと推測される。

3-6-6-2.地島城（城腰）

地島は中世には、泊島、或いは大島に対し小島ともよばれていた。地島と対岸の鐘崎との間には地島曾根とよばれる暗礁が連なっており、地島への渡海には天然の防衛線となる。『玄海町誌』では、祇園山（標高142m）を比定している。白浜港を見下ろす山頂付近に削平地あり。



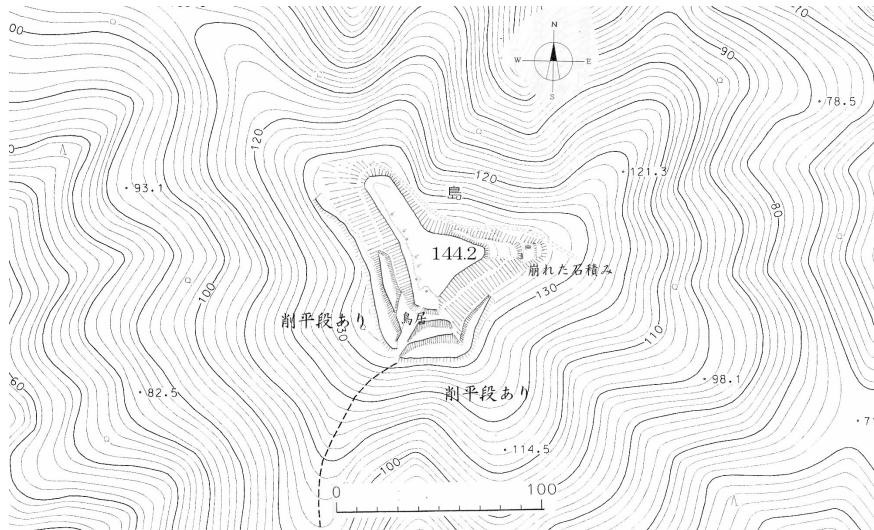
祇園山

『筑前国続風土記拾遺』

白濱の上に高山あり。城腰と云。城址有。城主詳ならず。

城腰城址 『福岡県地理全誌』

白濱の北の山なり。山上に平地一町四方許り。城主不詳



地島城縄張図

3-6-3. 勝島城（城の辻）

勝島は、草崎半島から北西約300mに位置し、海上からの攻撃に対し神湊を防御する位置にある。島の最高地点に「城の辻」という地名が残る。『筑前国続風土記』は宗像氏貞が永禄の頃、隣国の敵を避けて渡海した時の端城としている。



勝島

『宗像記追考』

(略) 永禄三年に占部甲斐守尚安、勝島に取渡り、夫より神湊の草崎の城を拵へて盾籠り
(略)

3-6-4. 草崎城

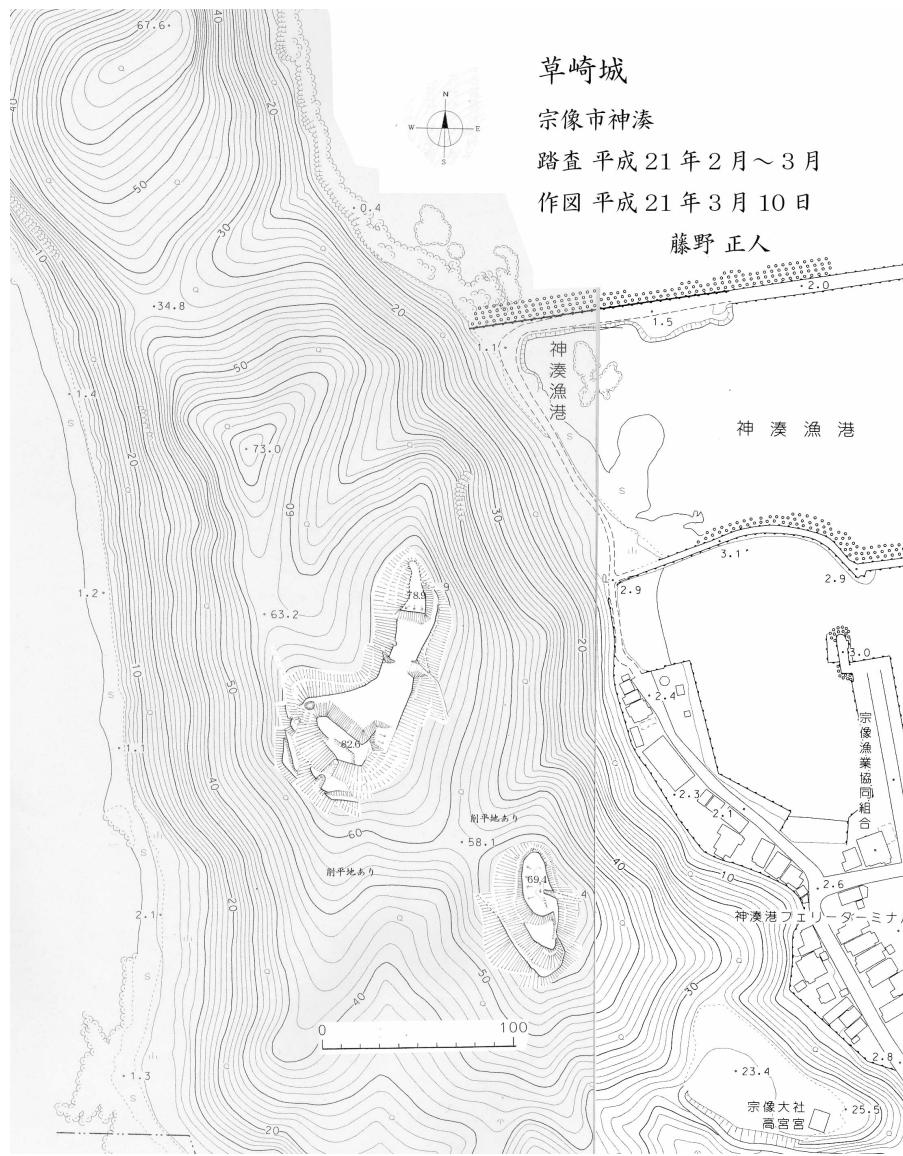
草崎半島は、南の一の岳から四の岳に到る四つの峰から成り、四塚とも呼ばれる。この一の岳と二の岳に城跡と思われる削平地がある。

『宗像記追考』などは、永禄三年の春、占部尚安が大島から渡海して築き、尚安は、ここで謀をめぐらし許斐要害を取り返したと伝える。眼前の勝島・地島・大島と連絡を取り合う重要な位置にあり、海上からの攻撃に対し神湊を防御する城にもなったと考えられる。

神湊は中世には湊浦とよばれていた。また、釣川の河口にも近く、釣川を船でさかのぼれば、宗像社の辺津宮に行くことができ、宗像氏にとり最も重要な浦であったと考えられる。



草崎城



草崎城縄張図

3-7. 大内氏による宗像郡の直轄領化と赤間庄にある名残城
 (西郷庄の粕屋郡編入と鞍手郡に編入された赤間庄と野坂庄)
 所在地 宗像市名残、葉山



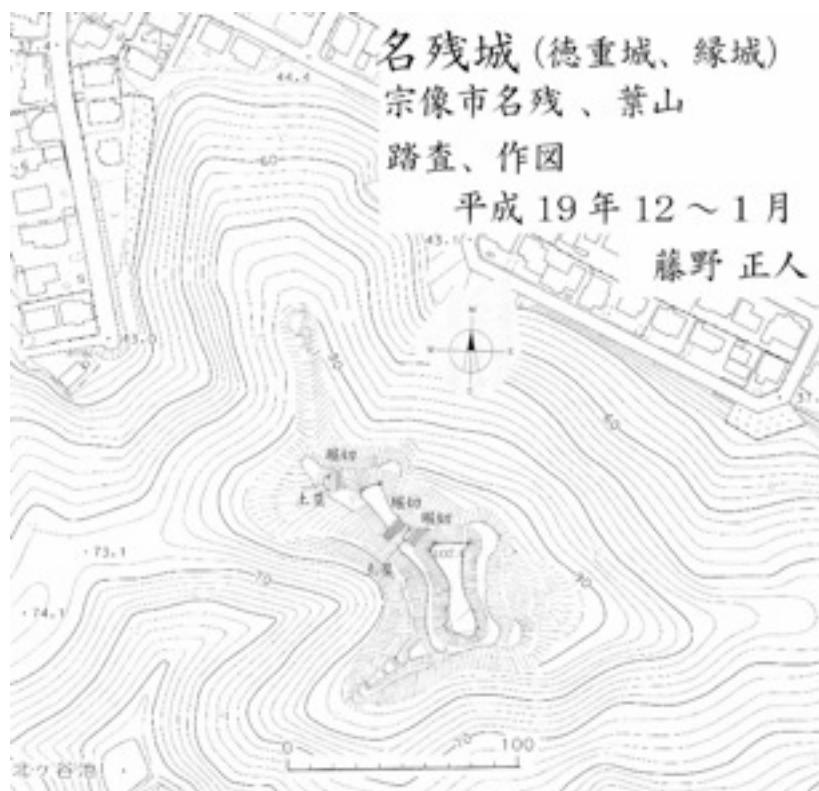
名残城

徳重村古城、縁（へり）城とも云う。宗像市の南部、名残と葉山の境にある、標高107.4mの山頂に遺構が残っている。北に、博多往還（唐津街道）を望み、東南に鞍手郡（宮若市）境の赤木峠を睨む位置にある。また、岳山城（蔦ヶ岳城）から見ると、岳山城（蔦ヶ岳城）と宮永城（宮若市）を結ぶ直線上に名残城が位置しているのがわかる。現況は、立ちに入る人もなく山林に覆われている。

城は、『筑前国族風土記拾遺』に詳しい、拾遺が記するように主郭は、五畝（約500m²）、その北西に三畝（約300m²）の曲輪がある。また、主郭の周囲を帯郭が巡っており、このことが、縁（へり）城の所以かもしえない。

主郭と北西の曲輪との間には、土塁を挟んで堀切が二条確認できる。また、北西の曲輪の先には、尾根が続き、土塁を設けた堀切が一条あり、北西尾根からの侵入を防いでいる。

『筑前国族風土記拾遺』によると、この城は、宗像大宮司氏続が、大友勢力の侵入に対し、赤間庄三百町を城領として大内義隆に援兵を請い、筑前守護職の大内義隆は、先代の大



名残城縄張図

宮司で、山口に出仕していた、黒川隆尚（宗像正氏）を派遣、名残城に入城させたと伝える。

宗像氏続、黒川隆尚（宗像正氏）の活躍した、天文初期（1532～）以前より、大内氏は、北部九州に進出し、少弌、大友氏の勢力を圧迫、筑前守護として筑前国領有化を進め、宗像においても、大宮司職の相続にも介入し、さらには、宗像正氏に周防国吉敷郡黒川郷を与え、山口に出仕させるなど、宗像氏の家臣化を進めていた。

宗像郡内においても、赤間、野坂庄を鞍手郡に編入し、また、西郷庄を糟屋郡に編入し直轄領とし、大内氏の郡代の統治下に置き、宗像地方の直轄領化を進めていた。

名残城は、赤間庄にあることから、大内氏直轄領防衛のための拠点城郭であったとも推測される。『筑前国続風土記拾遺』の大内氏の家臣となった黒川隆尚の入城は、このように大内氏勢力が宗像郡に浸透したことを婉曲的に伝えているのではないだろうか。

また、時代は下り、弘治三年（1557）大内氏は、滅亡し、宗像地方の大内氏直轄領は、再び宗像氏の支配するところとなる。

宗像氏貞は、永禄五年（1562）赤間庄の薦ヶ岳（宗像市陵巖寺）を大改修し、本城（岳山城）とするが、名残城は、岳山城の西南を守る支城として、また、宗像氏の若宮庄の拠点城郭宮永城や、西部防衛拠点の許斐岳城との通路上の要地にもあることから各拠点城郭との繋ぎ（連絡用）の城として機能したものと推測される。

縁古城『筑前国続風土記拾遺』

（前略）此城を置し事宗像軍記に永正の始宗像氏続社務となり、其頃豊後大友より田原、田北、瓜生を大将として豊前田川越をして筑前を攻しむ、所々の城、或は落され、或は降る、大友則岡城に瓜生左近貞延を城主として岡千町を領しけり、瓜生ややもすれば打出て、宗像の植田をこめ郷人をなやまし、或は許斐城を攻て領分を犯す、行末如何と思ひければ石松但馬守尚季、畦口伊予守益勝を両使として大内義隆に此由を告て援兵を乞、其上可然大將一人宗像へ召置れ候ハ、名残城に入申、赤間三百町、古物・神崎三百町を名残城の軍用に奉るへしと有ければ、義隆聞給ひて氏続の乞所に任せ、黒川刑部少輔隆尚（宗像正氏）を遣して名残城にこめ置ければ、大友重て宗像に攻来る事なしとあり。

3-8.拡大した領域（鞍手郡と遠賀郡）支配に苦慮する氏貞と城郭

3-8-1.若宮庄の拠点宮永城

所在地 宮若市宮永

宮永城の位置する若宮盆地は、他の勢力との接触点とも言える。宮永城は、この若宮盆地のほぼ全域を視界に収める雁城（がんぎ）標高333mに立地している。



宮永城の東には、杉氏の本城

宮永城

『竜ヶ岳城』や『祇園岳城』を初めとする城

砦群、南の鞍手郡と嘉摩郡境に、秋月氏の拠点城郭『笠置城』、西に吉川庄の拠点城郭『湯原草場城』がある。宗像氏の若宮庄経営の拠点城郭『宮永城』とともに、これらの各氏の拠

点城郭が若宮盆地をいる。また、これらの拠点城郭の他に、若宮盆地には、20を超える小規模な城郭が存在している。

宮永城は、北西に糟屋郡と鞍手郡の境に横たわる西山連山を臨む。そして、薦野越の峠道を越えた糟屋郡側は、立花山を拠点とする大友氏勢力の地であり、宗像領に対するように西山連山から派生する尾根上につぐみ岳城、薦野臼ヶ岳城、米多比城が確認できる。

その構造は、標高333mの山頂を中心に、南北に長い尾根及び、その尾根上に削平地が確認できる。特徴的なのは、明瞭な畝状堅堀が、山頂周囲を巡っている。山名の雁城（雁木）「がんぎ」は、畝状堅堀の形状を雁の群れがジグザグに並んで飛ぶ姿に例えた名称と考えられている。

この、畝状堅堀で防衛された、南北約100mの曲輪群が、宮永城の主要部分と思われるが、畝状堅堀の範囲外にも、南東に派生する尾根や、南の標高300mのピークにも曲輪らしい削平地が確認できることから、当初は、これらの削平地を含めた広い範囲が城域だったものと推測される。

何回かの改修の後、最終的には、畝状堅堀の設置された範囲にコンパクトにまとめられたと考えたい。この畝状堅堀の設置を行った改修時期として考えられるのは、天正九年に起きた戦国期鞍手郡最大の合戦、後年「小金原の合戦」といわれる吉川庄における、宗像勢と戸次氏との合戦である。

宮永に隣接する、南東の吉川庄稻光で双方は最終的に激突し、宗像勢は大きな打撃を受け敗退する。この合戦により、宗像勢は、文献で確認できるだけでも天正十一年頃まで、立花山城を拠点とする戸次氏と全面戦争となり。戸次氏の攻勢により、宗像領に侵入を許すこととなる。この軍事的緊張は、天正十二年北部九州に大きく勢力を拡大していた竜造寺隆信の戦死により開始された大友氏の北部九州における攻勢に連動した、戸次氏の筑後出兵まで続くこととなる。



宮永城縄張図



宮永城の畝状堅堀（青い部分が堅堀）

この間、宗像氏は宗像領防衛のために、立花山を拠点とする対戸次氏防衛ラインを築くこととなる。その中心となったのが、許斐岳城であり、その両翼を支えたのが、田島の片脇城と、若宮庄の宮永城である。

片脇城の項で説明したが、両城砦の共通点は畝状堅堀である。

片脇城も、その広大な城域を畝状堅堀によりコンパクトにまとめたように、宮永城もこのとき改修されたものと考える。

3-8-2.遠賀庄にある手野（三吉）城

所在地 遠賀郡岡垣町手野、三吉

孔大寺山（499m）から北東に派生する岡垣町手野と三吉の境にある雨乞山（城原山）標高223.2mの山頂とその北東約200mに位置する標高174.9mの山頂に遺構が確認できる。

北に波津浦を望み、田島から樽見峠を越えて芦屋に向う古代からの大道を押える位置にある。

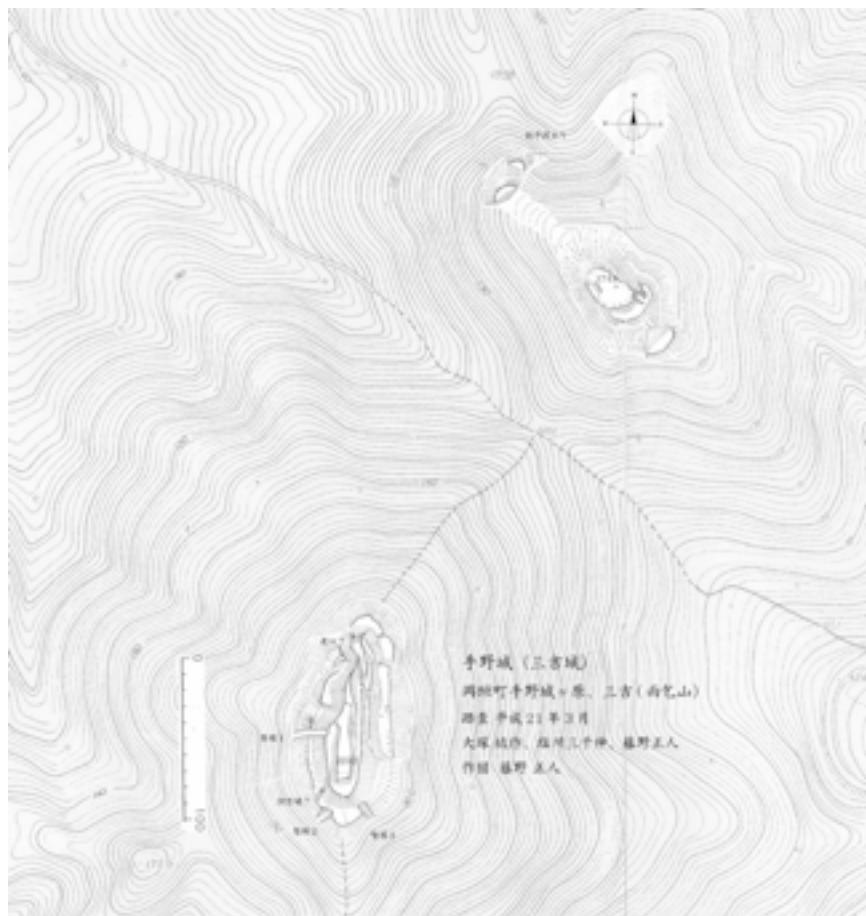
南東には、永禄二年遠賀川西岸に影響力を失った麻生氏の拠点岡城（岡垣町吉木）を眼下に押える。

雨乞山の遺構は、山頂を中心南北約100mに確認できる。南北に細長い山頂の223.2mの曲輪を中心にその周囲に腰曲輪が幾重にも廻っている。南は、尾根が孔大寺山に繋がっていることもあり、東西に2条の堅堀を設置し、尾根を遮断している。この堅堀のある曲輪は不整形なところから、もとはこの二つの堅堀は繋がっており、堀切だった可能性がある。

また、北東の174.9m



手野（三吉）城



手野（三吉）城縄張図

の山頂には、楕円形状の曲輪を中心に南東と北西に尾根が伸びており、南東に二段の曲輪、北西にも小規模な二段の曲輪が確認できる。

この二つのピークの間には、現在は、廃道となっているが東西に手野から三吉を経て岡城のある吉木に向かう峠道が存在している。この道路を押える立地である。

3-8-3.宗像氏の御牧（遠賀）、鞍手郡における領主権力の限界

「筑前諸将之事」『宗像記追考』の項に記述された宗像氏の城砦（番所や臨時的な陣も含む）は、18を数える。これらの城砦の多くは、宗像一族に関連する記述と城の番人が派遣されていることから、宗像氏の直轄城と考えられる。このうちの16の城砦は、宗像郡内に集中し、それ以外の地域では、鞍手郡と御牧（遠賀）郡には、各々一城のみである。

御牧郡における宗像氏の勢力圏は、遠賀川西岸地域（以下「遠賀庄」とする）であり、永禄二年頃、同地域から影響力を失った麻生氏が支配していた地域であり、鞍手郡における宗像氏の勢力圏は若宮庄であった。若宮庄を含む鞍手郡は、弘治三年に滅亡した大内氏がその郡代により直轄支配していた地域である。

これらの地域は、宗像氏貞の永禄三年の大島からの復帰により新たに組み込まれた地域といえる。

宗像氏の支配した、鞍手郡若宮庄や、御牧郡遠賀庄には、『宗像記追考』が記載する以外にも複数の小規模城郭が確認できる。

これら的小規模城郭は、宗像氏の直轄城でないとするならば、各々の村落に地盤を持つ、在地領主の城砦と考えられる。これらの在地領主たちは、自分たちの村落の持ち城たる小規模城砦を維持しつつ、その上級領主たる宗像氏の直轄城（宮永城、三吉城）に勤番したと考えられる。

多くの戦国大名は、その成長の過程で、村落を支配し在地領主を家臣化し、再編成する過程で在地領主の自治権を否定し、在地領主の自治権の象徴である村落の城砦を廃城にし、村落の軍事力をその直轄城に吸収していったものと考える。

そのことから考えると、宗像氏における、若宮庄と遠賀庄におけるその支配は、小規模な在地領主を家臣化する再編成の過程で、彼らの自治権を否定し完全な家臣化まではいかず、ある程度の在地領主層の自治権を残したままの状態ではなかつたであろうか。

そのことを裏付けるように、天正三年から始まった、宗像宮第一宮造営における両庄衆の負担が、宗像郡内に比べると軽いことなどから推察される。特に、宗像氏の遠賀庄支配は、遠賀川西岸から影響力を失った麻生氏の旧臣と思われる、在地領主瓜生（吉田）氏や竹井氏を通じて行われていた。遠賀庄衆は、庄内の高倉宮への段米（税負担）を理由に、宗像宮造営に対する負担軽減を瓜生氏や竹井氏に宗像氏へ交渉するよう嘆願している。

推測でしかないが、『宗像記追考』に記す、手野（三吉）城が、築城半ばで、工事中止に追い込まれたと記すのは、当然、普請に動員要請されたであろう、遠賀庄衆の反発もあったのではないだろうか。

手野城の築城目的は、『宗像記追考』には、船手押さえ（港湾の押え）として築城されたと記されている。しかし、眼下に麻生氏が支配の拠点とした岡城（岡垣町吉木）を見下ろし、また、垂水峠を越えて芦屋へ向かう道路を押える立地を考えると、築城目的は、宗像氏が新たに手に入れた遠賀庄支配強化を考えたものではないだろうか。

そして、宗像氏を上級領主として認め、その傘下に入りつつも在地領主として、旧来からの権利をある程度維持したいという遠賀庄衆の意向が、手野城築城を中断させた要因の一つではないだろうか。

また、そのような遠賀庄衆の自立性が、宗像氏が遠賀庄支配において譜代の代官を派遣せず、在地の有力者である瓜生氏や竹井氏を通じて遠賀庄支配を遂行せざるを得なかつたことを表していると考えたい。

若宮庄の状況は、複雑である、宗像氏は、大内氏滅亡後、大内氏の直轄領であった鞍手郡にその勢力を伸ばし若宮庄を領有化したと思われる。その後、永禄十二年後半、北部九州の支配権を巡る毛利氏と大友氏の争いも、毛利氏の北部九州からの撤退により、大友氏が暫時筑前の支配権を握るが、毛利氏に与していた宗像氏は、西郷庄を割譲し大友氏と和睦することになった。大内氏の筑前支配時、その守護所ともなった糟屋郡高鳥居城衆の城領であった西郷庄に当時いたのは、河津氏を始めとする西郷党と呼ばれる旧大内家臣団であった。西郷党は、大内氏滅亡後、宗像氏と同盟し、糟屋郡立花山城の大友勢力と対立する。

毛利氏撤退後、大友氏が宗像氏に和睦の条件として提示したのは、西郷庄割譲とともに、西郷党の領袖河津氏の殺害も含まれていたと考えられる。宗像氏貞は、盟友河津氏を殺害後、西郷党を西郷庄より、若宮庄へ移住させたとされる。

宗像氏貞は、大友氏との和睦で犠牲にした負い目もあったのであろうか、河津氏の遺族を厚遇したと伝えられる。氏貞は、西郷党を若宮庄へ移住させたものの、小規模勢力とは言え大内氏政権下において同じ大内氏の家臣であり大友勢力に対抗する盟友であった西郷党諸氏を宗像郡内の譜代の家臣と同様なまでに家臣化することはできなかつたのではなかろうか。

小金原合戦について、宗像氏貞は、鷹取城へ兵糧補給を行なった戸次勢に対し戦闘をしかける意思はなかつたと言われる。小金原合戦の原因は、小勢力ゆえ和睦の犠牲となつた西郷党の大友氏（戸次氏）に対する遺恨とされるが、その背景には、このように、宗像氏による在地領主（西郷党）の家臣団への再編成が緩やかで、在地領主自身に、ある程度の自治権を残した緩やかな統制状態が、小金原合戦のような、上級領主である宗像氏の意思に反し村の論理による独自の行動に走らせたとはいえないだろうか。

また、前述したように若宮盆地は、他勢力との接触地点である。特に、穂波郡との境には、筑前における最大の反大友勢力である秋月氏の拠点城郭である笠木城が、宗像氏領若宮庄を眼下に治める位置にある。小金原合戦における戸次氏の着到状からは、秋月氏の家臣も参戦していることが確認できる。西郷党の若宮庄移住に対する大友氏への遺恨と宗像氏による緩やかな統制、さらに反大友勢力秋月氏領と接し、影響を受けやすい地理的条件が重なつたことが小金原合戦の原因と考えたい。

若宮庄地域の城郭を踏査された、中村修身氏（3）は、中央では、織田信長、豊臣秀吉が在地領主層の家臣団化と常備軍化に成功していた時代、宗像氏支配下の当地域において村落ごとに小規模城郭が確認されることを分析し、在地の小領主たちは、経済的基盤の在地（村落）と小規模な城郭ではあるが独自の軍事施設を持つことで（上級領主宗像氏に対し）自己の意思を貫きえることができたのではないかと推察している。

4.まとめ

4-1.宗像氏の本城の変遷と岳山城

本城は、戦国の乱世を反映するように、より高く、より堅固な山へ移り、宗像氏の支配領域拡大とともに規模も拡大し、氏貞の権力の強化を象徴するように構造も主郭を中心に求心力を高めていく。片脇城（104m）→白山城（主郭318.8m）→岳山城（369m）

構造も、主郭と対等な高度の独立した曲輪が並ぶ白山城に比べ、岳山城は明らかに、山頂主郭部が、他の曲輪を従属関係においている。この山頂主郭を頂点に階層化された曲輪群の配置は、氏貞の権力基盤が強化され安定してきたことを反映しているものとも考えられる。

それと同時に城郭内部の施設も充実している。岳山城は、高い石垣こそないものの、曲輪の縁には、土留の石材を多数使用し法面が補強されているのを現在も確認することができる。また主曲輪より一段降りた東曲輪には、昭和初期に建築された城山閣の瓦に混じって、赤茶けた中世瓦を見ることができる。織田、豊臣政権の城郭が浸透する以前の山城における瓦の使用は、他の地域ではあまり見られず北部九州の独自性を示しており、立花山城（戸次氏）、古処山城（秋月氏）、高祖城（原田氏）等北部九州の領主の本城クラスに特に使用が確認されている。

岳山城の瓦が何の建物に使用されたのかは、埋蔵されている瓦の量を発掘調査し総合的に判断するしかないが、当時としては高価であった瓦の使用は、建物の屋根が板葺きや茅葺きが主流であったことを考えれば、城内のすべての建物に使用されたのではなく、氏貞の権威を示すべく城内の象徴的な建築物に限定的に使用されたのではないだろうか。重厚感のある城門等の施設に使用された可能性を想定したい。

さらに、各々の城郭の周辺に配置されている城砦の数も、片脇城や白山城に比べると圧倒的に岳山城の周辺が多い。城下の三つの番所や、支城と思われる多数の城郭の設置は、氏貞が赤間を宗像領の政治経済の中心として城下整備を行なっていたことを反映している。

4-2.城郭配置から見とれるもの

城郭配置から考えられるものとして、水陸の交通を押えることと同時に、ほぼ3キロ程度の距離内に城郭が連絡していることを考えると、狼煙や鐘等による情報伝達を考えての配置であったと思われる。

特に、本城岳山城は、その連絡網の中心にあり、各地域の拠点城郭である、許斐岳城、宮永城、手野城をその視界に押えるとともに、それらの城郭への間には、中継のための役割を果たすと思われる城郭が配置されているのを確認できる。

4-2-1.陸路を押える

芦屋～樽見峠～田島～津屋崎～博多

手野城、吉田城、大障子城、片脇城、勝浦岳城、宮地岳城

唐津街道（博多往還）

石丸城、岳山城、名残城、田久城、許斐岳城、高宮城、螻蛄羽子城、飯盛城

4-2-2.水路や農業生産基盤の水利権を押える

西郷川流域

亀山城(福津市福間駅東)、高宮城(福津市畦町)、蟻岐羽子城(福津市本木)、城の浦城(福津市本木)

釣川流域

草崎城、吉田城、大障子城、片脇城、須恵城、田久城

4-2-3.海上交通の抑え(宗像水軍を支援する海の城砦群)

大島城(城山・城腰)、地島城、勝島城、草崎城

4-2-4.宗像宮(辺津宮)を防衛する四城郭

片脇城、吉田城、勝浦岳城、大障子城

4-2-5.氏貞の拠点赤間を防衛する城砦群

岳山城、平等寺城、今井城、田久城、名残城、須恵城

赤間城下にある、三つの番所 赤城、石丸城、草場

4-2-6.許斐岳城を中心として、宗像氏の対立花防衛ラインを形成する諸城

片脇城、宮永城、宮地岳城、冠城、高宮城、蟻岐羽子城、飯盛城

4-3.岳山城を中心にはほぼ南北にならぶ諸城と戦国期の情報伝達

携帯電話やインターネットが普及した現在、私たちは、電子メール等を利用して離れた場所にいる複数の相手に対して、瞬時に、同じ情報を伝達することができる。しかし有事に際して、迅速な対応をとることが求められた戦国時代において、情報伝達は、どのような手段で行なわれたのであろうか?

天正九年(1581)十一月十三日、後世、小金原合戦と呼ばれる、鞍手郡吉川庄での戸次氏との戦いにおいて、『宗像記追考』等の記述において、遠賀庄衆の吉田左近允貞延が参戦している記事がある。遠賀庄は、宗像氏領の中で、合戦の行われた吉川庄から最も遠い位置にある。遠賀庄から吉川庄までの距離は、直線距離で約20kmである。この戸次氏との戦闘が発生したことは、どのような経路で宗像氏貞に伝わり、また遠賀庄衆への吉川庄への出兵要請が伝達されたのであろうか。宗像氏の支配領域内での情報伝達に関わる城郭の役割が、その配置から考えられないだろうか。

当時、宗像氏貞の本城は、宗像市陵厳寺にある岳山城である。小金原合戦における若宮庄衆と戸次氏との戦闘が勃発したことは、直ちに、若宮庄から岳山城下に連絡されたと考える。

当時の伝達方法としては、①狼煙、烽火 ②鐘、太鼓 ③旗 ④馬、飛脚などが考えられる。より遠くへ、そして早く伝えられる順にすると、おおよそ①→④の順になるのではないだろうか。ただ、狼煙は単純に言えば煙の有無で伝達する方法であるため、早馬や飛脚など人自身による伝達に比べると圧倒的に伝達できる情報量は少ない。情報や命令をより多くそして、正確に伝えられる優位な順に考えると、④→①の順になると考えられる。

狼煙は、煙の有無、そして夜間は火の灯りによるものである。有事の勃発を伝達するだけであれば、気象条件の阻害要因がなければ、狼煙が最も遠くにそして迅速に伝えることができる。宗像氏貞の本城岳山城からは、ほぼ宗像氏の拠点城郭をその視界に捉える事ができる。小金原合戦が生じた、若宮方面の拠点城郭宮永城までの距離は、直線で約10kmであ

り、宮永城において狼煙を起こせば、岳山城には中継を要することなしに連絡は可能であったと思われる。

しかし、どのような事件が起きたのかその内容やそれに対応する指示を伝えることは困難である。鐘、太鼓は、音を伝達手段としている。鐘、太鼓が聞こえる距離は、現代社会の自動車等の騒音もなかった戦国期においては、狼煙には劣るものもある程度遠くまで伝達可能であったと思われる。鐘、太鼓においては、打ち方の種類において、ある程度の信号化が可能であり、信号化することにより簡単な事件の内容や指示を行なうこともできたのではないかと推測される。

宗像氏とは関係ないが、糸島市にある山城で、旗振嶺城という小規模な城砦がある。眺望のよい地点に立地しており、山名の由来は、旗による伝達を行なった連絡用の城砦であったことの名残ではないだろうか。旗は、狼煙と同じように視覚に訴える伝達方法である。旗の大きさも関係するが、旗を目視できる距離には限界があることから、狼煙、鐘、太鼓程には遠方に連絡はできなかつたのではないだろうか。ただ、旗の種類や、振り方にバリエーションを持たせることにより信号化することは可能であり、狼煙より多くの情報を伝達できたと考える。

馬、飛脚については、前述の①狼煙、②鐘、太鼓、③旗に比べると伝達速度は遅い、しかし、連絡者が文書や口頭で詳細な情報を伝達することが可能である。

では、どのような伝達方法が可能であったか岳山城を中心に、吉川庄へ駆けつけた吉田左近允貞延ら遠賀庄衆の居所遠賀庄と合戦が起きた若宮庄間の城砦配置について考えたい。

岳山城を中心に遠賀庄手野（三吉）城と若宮庄の拠点城郭宮永城を結ぶとほぼ南北に直線上に三城が並ぶことがわかる。

北 手野（三吉）城—5km—岳山城—10km—宮永城 南

さらに、手野城—岳山城間には、おおよそ直線上に、確認できる中継できそうな城砦を加えると以下のようになる。

手野（三吉）城—1.5km—龍昌寺山城—2km—上山堡—1.5km—岳山城

なお、吉田左近允貞延が所在した遠賀庄吉木には、旧領主麻生氏の居城と言われる岡城がある。岡城と遠賀庄の城砦との距離は、以下のとおりである。

手野（三吉）城—1.5km—岡城—1.5km—龍昌寺城

※上山堡『筑前国続風土記拾遺』平等寺古城の項にあり、金山北岳付近にある削平地と思われる。

また、岳山城—宮永城間において、同じく直線上に確認できる中継できそうな城砦を加えると以下のようになる。

岳山城—1.5km—草場（番所）—1.5km—名残城—2km—朝城—2.5km—山口の諸城（茶臼山城、山下城、尾園城）—2.5km—宮永城

以上のように、岳山城から遠賀庄、若宮庄への伝達は、約1.5km～2.5kmの距離で中継可能な城砦を確認できる。

狼煙を利用することだけを考えれば、中継地点は必要とせず、有事を本城の岳山城に伝達可能であると思われる。ただ、このように、1.5km～2.5kmの距離で中継可能な城砦が確認できることから考えると、雨天には使用できない狼煙の代替策として、鐘、太鼓等の方法も利

用されていたと考えたい。さらに、どれだけの軍勢を召集し、どの方面に向うか等の具体的な出兵命令を伝えるには、人が口頭なり、文書で伝えるしかないと思われる。

おそらく、中継可能な城砦の麓には、伝令要員や馬が配置されており、有事の際に駆伝のように決められた区間を文書の配達や口頭連絡のために走っていたものと推定される。従つて、有事の際には、複数の伝達手段を併用していたと考えたい。

有事の発生の伝達、初動警戒態勢の指示を伝達速度の速い狼煙や鐘等により行い、具体性や正確性を必要とする指示命令などの情報伝達については、馬の利用や飛脚等の伝令要員による伝達により行なっていたのではないだろうか。

以下は、私の貧しい想像によるものだが、小金原合戦で、若宮衆が鷹取城から立花領へ帰る途中の戸次勢を待伏せし合戦となった情報は、おそらく宗像氏の若宮庄の拠点宮永城から狼煙や鐘等で、宗像氏貞の居城、岳山城へ伝達されたであろう。岳山城で宮永城から立ち上る狼煙を見た氏貞は、何らかの有事が起ったことを知り、同じく岳山城において狼煙を上げ、鐘を鳴らし、領内各地へ警戒態勢をとるよう警報を支城網により伝達し、領内の家臣団に岳山城下や各々の居住地を管轄する支城等へ武装し集合することを伝達したであろう。岳山城からの狼煙を、吉木の岡城において知った吉田貞延は、すぐに岡城において伝令により近隣の遠賀庄衆へ警報を伝え、また、鐘を鳴らし、岡城周辺に居住する家臣達に岡城下への集合を命じたであろう。

氏貞は、領内各地へ警報を出すとともに、宮永城から、駆伝のように中継して、事件の具体的な情報を伝える伝令を待つたであろう。伝令により、若宮庄衆が戸次氏と戦闘になったことを知った氏貞は、直に戦闘を停止させるために派遣可能な軍勢のいる地域に伝令を走らせたと思われる。特に、遠賀庄衆は、戦闘状態となった戸次氏領と直接境を接しないため、派遣の対象になったのではないだろうか。氏貞の若宮庄への派遣命令を携えた伝令が吉木岡城に到達したときには、既に吉田貞延の率いる遠賀庄衆の出発準備は完了していたのではないだろうか。

恐らく、岳山城を中心として、宗像社のある田島方面や、西方防衛拠点の許斐岳城へは、釣川や博多往還（唐津街道）に沿って、伝令要員が配置された中継地点が設けられていたものと考えたい。

城郭は、当時の情報ネットワークを形成する施設としての側面も有していたのである。

4-4. 畝状堅堀を設置する城

土造りの城において、究極の防御施設である畝状堅堀は、宗像氏のすべての城郭に設置されているわけではない。本城と特に軍事的緊張が高い他勢力との境目地域の城郭にのみ設置されていることがわかる。

畝状堅堀の設置が確認される宗像領内の城郭

- ・本城（白山城、岳山城）
- ・その他（許斐岳城、片脇城、宮永城、腰山城）

上記のうち、片脇城と宮永城は、天正九年吉川庄合戦（小金原合戦）による軍事的緊張により設置されたと考えられる。

特に、宮永城の立地する若宮盆地は、各勢力の接触地点であり、その軍事的緊張を表すように、敵状堅堀を設置した城砦の密度が高い。若宮盆地東の杉氏の本城、竜ヶ岳、祇園岳の城砦群、南の秋月氏の拠点城郭笠置城、西の小田氏（大友家臣）が吉川庄の拠点城郭としたと考えられる、湯原草場城等は、いずれも敵状堅堀の設置が確認できる。

また、小規模城郭であるが、腰山城（鞍手町新延）にも敵状堅堀が確認できる。腰山城の立地は、赤間城下より猿田峠を越えて鞍手町の平野部に出る入口にあり、鞍手方面から赤間城下への侵入を防ぐ重要な位置に立地している。またこの道路は、後世の長崎街道の宿場町木屋瀬に向かっており、腰山城は、当時も重要な道路を押さえる役目を果たしていた。そして、龍ヶ岳城（宮若市龍徳）を本拠にする杉氏の勢力圏に隣接し、また、豊臣秀吉の九州出兵直前、天正十四年頃秋月氏が兵を入れていた劍岳城（鞍手町中山）にも近い他勢力との境目の地である。

さて、天正九年小金原合戦以降、宗像氏と敵対することになった立花城督戸次氏領域内において、敵状堅堀が確認できるのは、本城である立花山の城砦群を除いては、宗像氏領である宗像郡や鞍手郡境に近い、鶴岳城（福津市舎利蔵）と米多比城（古賀市米多比）においてのみ確認できる。

「豊前覚書」によると鶴岳城は、天正九年の小金原合戦後、戸次氏によって築城（改修）されていることがわかり、敵状堅堀もその折に設置された可能性が高いと考えられる。

なお、隣接する在地領主薦野氏の本城薦野臼ヶ岳城には、敵状堅堀は確認できない。

米多比城は、小規模であるが、里城と山城の関係がわかる貴重な城郭遺構である。立地から薦野氏とともに戸次氏の与力として立花城衆として活躍した在地領主米多比氏の管轄化にあったと考える方が、自然であるが、隣接する薦野氏の領域内にある薦野氏の本城臼ヶ岳城（古賀市薦野）と敵城堅堀のある鶴岳城を考えるとき米多比城の敵状堅堀も鶴岳城と同時期に戸次氏の意思決定により敵状堅堀を設置したと考えることができないだろうか。

米多比城の立地は、鶴岳ほどではないが、やはり宗像氏領宗像郡に近く、また、背後の西山を越えれば、秋月氏を始めとする反大友（戸次）諸勢力との接触地点吉川庄であり、また、宗像氏の若宮庄の拠点城郭宮永城とも対面する位置にある。

敵状堅堀の設置事例については、岡寺良氏(4)が、秋月氏領内の城郭を事例に、秋月氏の支配下にある城館の中でも、敵状堅堀群を備える城館の分布を見ると、本城（御隠居城含む）あるいはそれに近く、密接な関係にあったと考えられる城館と、支配領域の「境目」領域に当たる城館に認められ、それら以外の城館、たとえば、本拠地と「境目」領域との中間領域にあるような城館には、ほとんど敵状堅堀群は確認できないことを明らかにしている。

そして、全ての「境目」領域に当てはまるわけではないがとしながら、秋月氏が城館の改修についての考え方とは、ただ闇雲に全ての城郭に対して敵状堅堀群の敷設を行なったのではなく、防衛戦略上、特に重要であった本拠地と、領域拡張によって急激に軍事的緊張が高まった方面的「境目」領域の城館にのみ行なうという、効率的な改修方法であったとの見解を示している。

このことは、宗像氏領内や戸次氏支配下にある城郭についても当てはまるようと考えられる。

4-5.城郭の存在意義、落城した記録がある城郭は意外に少ない

落城した記録がある城郭は、宗像郡内では、宗像氏貞が、密かに大島より渡海し、大友勢力を領内から一掃した永禄三年（1560）三月の許斐岳城落城と、天正九年（1581）小金原合戦直後に、恐らく宗像氏の防衛体制が整わぬうちに戸次氏が宗像領内に侵攻し、落城した宮地岳城であるが、いずれも相手の虚を突いた奇襲により陥落したと考えられる。

文献に残る城郭を巡る戦いが最も多く表れるのは、許斐岳城であるが、記述内容からすると山城本体においての戦いはほとんど認められず、里城等の山麓での戦いが圧倒的に多いことがわかる。

軍事的緊張状態が発生した地域にある城郭は、天正九年の小金原合戦後の、片脇城や宮永城に見られるように敵状堅堀を初めとして、堅固な改修が行なわれると同時に、兵員の増員も行なわれたと推定される。軍事的緊張状態にさらされている城郭は、改修のうえに改修を重ねられますます堅固な城砦となり攻めにくくなつたと考えられる。そのような中、敵状堅堀や多数の連続する堀切が設置されていったと考えられる。

山城の攻める側は、山上にある曲輪を目指す。しかし、山上の曲輪の周囲は、切岸と言われる人工の崖が守備側により設置されている。さらに軍事的緊張状態の高い地域の山城の切岸下の斜面には、敵状堅堀が設置され曲輪への接近を阻む。攻城軍を切岸にさえ近づかせない。また、許斐岳城に見られるように、麓から山上へ向う尾根筋には、これでもかというほど幾重にも尾根を遮断する堀切が設けられ山上への接近を阻んでいるのがわかる。

このように戦国の山城は改修のたびに難攻不落となり、攻める側も、攻略するには守備側に対し圧倒的多数の兵力を要しなければならない山城での戦いを避けるようになっていったのではないだろうか。

山麓の里城での戦いが多いのは、攻める側も、攻撃は山上の城郭より要害性の低い山麓の里城までしか行なうことができず、多大の犠牲を覚悟しなければならない山上の城郭までは追撃しようとは考えなかったからかもしれない。そして、戦国期の各地域に見られる、攻め手が、山城の麓において、稻穂ぎや麦穂ぎなど、収穫物を搾取する行動をとるのも、山上での戦が困難なため、山城に籠城する敵を山下に引き出すことを目的に行なわれたことも十分ありえるのではないだろうか。

では攻める側が圧倒的兵力を有していた場合の戦国期の城攻めは、どうであったろうか。永禄十二年（1569）四月毛利氏は、数万の軍勢で筑前における大友氏の拠点糟屋郡立花山城を攻める。宗像氏貞も毛利氏に与している。毛利側の史料『森脇飛騨覚書』によると守備した大友勢の籠城軍は六百人程度だったと記載されている。

これだけ圧倒的な兵力差があるにもかかわらず、毛利は、本城の周囲まで攻め寄せながらも、救援に来た大友本軍と籠城軍を遮断し、完全に補給路を断ち、城方が干上がるのを待つという作戦を取っている。結果的に完全に補給を断たれた大友の立花山籠城軍は、二ヶ月後の閏五月開城を選択した。毛利軍は力攻めで攻め落とすのに十分な兵力を持つつも、最後まで、積極的な攻城戦を行わなかつたのである。

永禄十二年冬、立花山を奪取し、大友軍と同地で対陣していた毛利軍は、本国に大内輝弘の侵入を許し北部九州から撤退する。それと同時に、追撃に移った大友軍は、宗像領内に侵攻し毛利氏に与した宗像氏貞の本城岳山城下に押し寄せたと伝えられている。

大友氏も北部九州五ヵ国の軍勢を率い圧倒的な兵力を有しながらも、岳山城を攻めることなく、筑前の小領主に過ぎない宗像氏に対し、外交交渉により西郷庄割譲等いくつかの条件を宗像氏が受け入れ大友氏の傘下に下ることを条件に宗像氏の領主としての権利を保障し和睦した。

兵力的には落城させることができない状態であってさえも、攻城戦を行なわないのはなぜだろうか。正面からの城攻めは割に合わないのである。木村忠夫（5）

天正十四年（1586）九州制覇を目指す島津氏が筑前における大友勢力の一掃を狙って北上し、九州戦国史上、最も激しい攻城戦といわれる岩屋城（太宰府市）の戦いにおいて、圧倒的兵力により筑前における大友氏の孤塙を守る高橋鎮種の籠城する岩屋城を力攻めにした。

島津軍は、激戦の末高橋鎮種を自害させ岩屋城を落城させたが、岩屋城（標高281m）は、巨大な城郭である立花山城（標高368m）や宗像氏の岳山城（標高369m）に比べると高度も低く小規模で要害に劣る城郭であるが、死を決した城将高橋鎮種に指揮された城兵の猛烈な抵抗に遭い、島津軍は、夥しい数の死傷者を出している。

その後、筑前における大友勢力最後の拠点立花山城を包囲するも、攻撃する余力がなく、大友氏を救援する豊臣秀吉軍の九州上陸を聞き撤退する。結果的に島津氏は、当初の目的であった筑前における大友勢力の一掃を果たすことができなかったのである。

岩屋城の戦いからわかるように、兵力的に圧倒的優位な状況にあってさえも、正攻法による攻城戦を行なえば、その後の作戦に支障をきたすような被害を被りかねない。このような事を想定すれば、攻め手の指揮官は十分に防衛準備された城郭に対し正面切っての戦いを決断できなかったと考えられる。戦国時代城郭の落城原因を見ると、攻め手の調略による城方の内応が数多くあるのも自軍の被害を極力抑えたいという意向が強く反映されていると考える。

また、永禄十二年の宗像氏貞の岳山城籠城において、大友軍の攻城戦を躊躇させた要因として、急峻な山塊に立地した天然の要害であること、曲輪群の延長が1kmを超える巨大な要塞であり、曲輪群の斜面に設置された約170本を数える長大な敵状堅堀群は、当時岳山城を包囲した大友軍に、視覚で要害堅固さを認識させるのに十分な効果を発揮したのである。この城を落城させるには自軍に多くの血が流れることを覚悟しなければならない。

さらに、氏貞も開城し降伏を迫る大友氏に対し、毛利氏の撤退により、救援を求める相手もない不利な情勢の中で、攻城戦になれば決死の覚悟で防戦し、死しても大友軍に甚大な損害を与えようとその気概を伝えたであろう。

この難攻不落の城郭の存在が、圧倒的な兵力で岳山城を囲んだ大友軍に対し、攻城戦を行なうことを躊躇させ、外交交渉による和議を選択させた大きな要因の一つと考えられる。

『宗像記追考』が、この岳山城を「当国無双の城」と記述しているのは、永禄十二年宗像氏の存亡の危機を難攻不落のこの要害が救ったことを表しているものと考えたい。

城の存在意義は、実戦のために使用されることより、攻める側に戦いを躊躇させる戦いの抑止力として存在していたことの方が大きかったのではないだろうか。そして、現在は樹木の陰に隠れている敵状堅堀を初めとする城郭を防備するための施設は、もともと見せること

により攻める側の戦意を減退させることも念頭に置き設置されたと考えるべきなのかもしれない。

5.最後に

宗像における中世遺跡、特に平地や低丘陵上にあったと思われる城館の遺構については、近代の開発による造成等により、その多くが失われたものと思われる。しかし、城山、許斐山、白山などの山城は、近代の登山道建設による破壊は見受けられるものの良好な状態で遺構が残っている。

また、宗像には、『宗像宮第一宮本殿置札』を始めとして、北部九州の戦国史の貴重な史料が多数残っている。また、これらを集約した『宗像市史史料編』などが編纂されている。

中世宗像氏の動向については、文献史学の視点から、『中世筑前国宗像氏と宗像社』を執筆した桑田和明氏を始めとする研究もある。

中世筑前に勢力を持った秋月氏等他の領主の文献が散逸しているのにくらべ、宗像氏は、近世大名へと存続できなかつたものの史料面では恵まれた環境にある。

そうした下地の中で、宗像地方に残っている山城の踏査を行なうことにより、総合的に中世戦国期における宗像氏の動向を検証していく環境ができつつあるのではないだろうか。

宗像といえば、世界遺産を目指す沖ノ島や多数ある古墳等の古代遺跡が、どうしても注目される。そのため、中世は比較的注目されていない。しかし、私たちの身近なところにあり、市民の憩いの山となっている城山や許斐山を改めて訪ねてみると、そこには、大勢力の狭間で、懸命に宗像の地を維持し、乱世を生き抜こうとした宗像氏の痕跡を見ることができる。これらの遺跡は文献史料上欠落している事象について、補足材料を与えてくれる。

宗像地方については、中世・戦国期城館の研究はまだまだ進んでおらず、不明な点も多い、今回の報告がその研究の一助になれば幸いである。

また、城郭の場合、事件が起こらないと文献に現れないケースもしばしばあることから考えれば、宗像の山中には、知られていない小規模な城郭がまだ眠っている可能性もある。筆者に、今後もいろいろなご教示を賜りたい。

なお、山城の測量においては、大塚紘作氏、塩川三千伸氏の多大な協力により縄張図を作成することができました。また、桑田和明氏や花田勝広氏には、資料の提供や力強いアドバイスを頂いたことを感謝したい。

「1-5城郭の各施設の部位名称について」は、佐賀県教育庁宮武正登氏の好意により転載させて頂いたことにお礼を申し上げたい。

以上は、2010年むなかた見聞学講座「宗像氏の城郭」資料を加筆訂正したものである。

引用文献

- (1) 宮武正登：「基山町の中世城館」『基山町史上巻』 第4編中世477～479頁 2009
- (2) 花田勝広：むなかた見聞学講座資料「古代中世の宗像神社と大宮司居館跡」2009
- (3) 中村修身：「北部九州の戦乱と城館 一中世の在地勢力の城郭 1 若宮盆地の小規模城郭」『日本中世の西国社会1 西国の権力と戦乱』（清文堂）275～281頁 2010

- (4) 岡寺 良：「戦国期秋月氏の城館構成－福岡県朝倉市・杷木地域を事例に－」『城館史料学第4号』城館史料学会1~22頁 2006
- (5) 木村忠夫：「筑前の概要」『福岡県の城郭』福岡県の城郭刊行会編 銀山書房 87~89頁 2009

参考文献

中世筑前国宗像氏と宗像社 桑田 和明 岩田書院 2003
福岡県の城郭 福岡県の城郭刊行会編 銀山書房2009
基山町史 上巻 2009
宗像市史 通史編第二巻（古代・中世・近世）1999
宗像市史 史料編第二巻（中世II）1996
若宮町史 第三章 戦国時代、第四章 若宮町の城郭2005
2010 新修福岡市史資料編中世①
地域相研究20下「宗像氏の居城である片脇城について」小川 賢